
蘭とコナンともう一人 回りだした歯車

計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蘭とコナンともう一人 回りだした歯車

【Nコード】

N9134L

【作者名】

計

【あらすじ】

工藤新一が江戸川コナンになってから十年の月日が流れた。蘭は新出と結婚し、コナンは高校生になった。そんなある日、突然蘭がコナンを訪れる。そして明かされる、蘭の想いと、コナンの想い。二人のすれ違いは、蘭を暴走させていく…

絶望（前書き）

蘭のヤンデレがテーマです。蘭好きな方は少しきついかもしれません。更新は不定期ですが、がんばります。

絶望

「お父さん！コナン君！ちょっと聞いてほしい事があるの！」

夕食中、毛利蘭は満面の笑みで突然そう言った。

「どうした。まさか、またエリとの外食でも考えてんじゃねえだろうなあ」

毛利小五郎は面倒くさそうに答える。

「ううん。今回は、もっと驚くことよ！」

その言葉に、さっきまで興味なさそうだった江戸川コナン（工藤新一）も箸を止めて蘭を見た。

「わたし、新井出先生と付き合うことにしたの！」

「…え」

コナンは眼を見開いた。

つかんでいた箸は、いつの間にか彼のひざの上に落ちていた。

コナンにとって、あまりに突然の恋の終わりであった。

蘭は、コナンの気持ちを知ってか知らずか、にっこりと笑いかけた。

時は流れて十年後。コナンは十七歳になっていた。黒の組織との決着は結局つかないまま、コナンは自分の本来の姿である工藤新一の年齢に達してしまった。普段は眼鏡をかけているため、何とかばれずにすんでいるが、これも時間の問題だとコナンは思っている。周りに自分の正体がばれてしまう前に、何とか決着をつけておかなければならなかった。

（早く…あいつ等のアジトを突き止めねえと…）

コナンは焦っている。今まで何度も衝突してきたが、いまだ組織の全貌はつかめない。だが、向こう側の幹部で残っているのは、ジンと「あの方」と呼ばれる組織のボスだけである。こちらにも十分勝機はある。

「おいコナン！なにボーっとしてんだよ！」

コナンはふと我に帰った。そういえば、自分は放課後の掃除の途中だったのだ。小嶋元太がコナンをじっとにらんでいた。

「まったく君は！高校生にもなって、掃除もまともにできないんですか？」

やれやれ、と円谷光彦は頭を振るった。

「最近何か考え事してるよね？何かあったの？」

吉田歩美が心配そうにコナンを見つめていた。

「い、いや。何でもねえんだ。悪いな」

コナンは自分自身に苦笑して掃除を再開した。

少年探偵団は五人そろって帝丹高校に入学していた。今年で二年生である。そして、当然ながら、灰原哀の顔も、そこにはあつた。

「まったく…。焦るのはわかるけど、学校で考えるようなことじゃないわね。これじゃ、みんなに心配かけるだけよ」

ふふ、と灰原は小さな笑みを浮かべて言った。

「へっ。おめーだって、小学生の頃は一番過敏に反応してたくせだよ」

「…もう慣れたわ。というか、あきらめているのかもしれないわね。どんどん大人になっていく私たち、もうそろそろばれてもおかしくないもの。だから、いつ殺されてもいいように、できるだけ今を楽しむつもりよ」

コナンはまた苦笑した。

「おめーってやつは…。どうしてそう暗いことしか考えられねえのかねえ」

「あら、これだけ前向きな考え、そうそうないと思うけど？『今を楽しむ』なんて」

「はいはい」

わかったわかった、となげやりに言って、コナンは掃除を続けた。

掃除が終わると、五人は部活に行く。サッカー部である。コナンは二年にして、早くもエースとして第一線で活躍している。元太と光彦もレギュラーであった。また、歩美と灰原はマネージャーとして部活に参加していた。灰原は最初は渋ったものの、歩美に押されていやいや入部した。歩美、灰原の二人は美人マネージャーとして校内で人気者となっていた。

練習も終盤にさしかかり、試合形式でのトレーニングの最中、突然「コナンくん！がんばってー！」という声がグラウンドに響いた。

ボールをキープしていたコナンはその声に気をとられ、一瞬動きが止まる。その間に、ボールはカットされてしまった。だが、コナンはそれよりも、その声の主に驚いていた。

かつて自分が愛した女性^{ひと}。世界で一番好きだった女性。そして、すでに自分からは離れてしまった女性。

「蘭…姉ちゃん？」

グラウンドの隅に、昔と変わらない笑顔でこちらに手を振る、新出蘭が立っていた。

「かつこ良かったよ、コナン君！まるで新一みたいだった！」

「あはは…。ありがとう。でも、新一兄ちゃんにはかなわないよ」

コナン、灰原、蘭の三人は工藤新一の家、現在の江戸川コナン宅に向かっていた。といっても、灰原はたまたま自分の家である阿笠博士の家が同じ方向というだけである。

練習が終わった後、蘭はコナンと少し話した後、新一の家に忘れ物をしたから取りに行きたい、とコナンに話しかけた。

（俺の家に蘭のモンなんてあったかな…）

コナンは少々の疑問を感じながらも、了承した。そして、今に至る。

「じゃあ私はここで…」

灰原は自分の家に到着すると、そそくさと家の中に入っていった。
(なんだ？ 蘭に挨拶くらいしてきやいいのに…)

「どうしたの Conan 君。着いたよ？」

「あ、ああうん」

「ふふつ。もう、また考え事？ 気をつけなきゃだめよ？」

蘭はいつもの笑顔でそう言った。Conan には、その笑顔には何か異質なものが含まれているように思えてならなかった。

(蘭…？)

結局、なぞは解けぬまま、自分の家の敷居をまたいだ。

「待ってて。今コーヒー煎れるから。インスタントだけど」

「うん、ありがと」

Conan はキッチンへ向かう。

Conan がコーヒーを作っていると、

「私、今年で 27 だよ。時間の流れてホントに速いよね」

と、ふいに蘭が話し出した。

「はは。そうだね。俺ももう 17 だよ。事務所に初めて入ったのが小学一年生だったから。…あれから、10 年も経ったんだね」

「うん。私なんか、もう結婚して 4 年になるよ。どんどんおばさんになっちゃうなあ」

蘭は新出と結婚していた。今は、新出の家で暮らしている。

「ねえ、Conan 君」

「ん？」

「…死ぬほど後悔したこと、ある？」

「え？」

Conan は手を止めた。突然の予想外の質問に戸惑っていた。蘭の意図が、まったく読み取れない。だが、蘭のまっすぐな瞳を見て、ふざけているのではないことはわかる。

「…あるよ。たくさん。数え切れないくらい。でも、後悔してても仕方ないから。いつまでもくよくよしてんのは、俺の性に合わないし」

コナンは出来上がったコーヒーを蘭に渡した。正直なコナンの気持ちだった。

「…コナン君は強いね。私には無理だった。今でも、うつん、これから先ずっと、私は後悔していくんだと思う。苦しむんだと思う」

「…何かあった？」

コナンは蘭のただならぬ様子を察していた。あの明るい蘭が、ここまで思いつめることは、ほとんどない。といっても、コナンは最近、ほとんど蘭とは会っていなかったのだが。

いくら失恋した相手だからといって、いや、失恋した相手だからこそ、何か力になりたかった。

「ごめんね。なんでもないの。…もうすぐわかると思うけど」

最後のほうは声が小さくて聞き取れなかったが、これ以上追求するのはやめることにした。これは自分の役目ではない。新出の役目だ。それに、自分はもう、深く関わらないようにすると決めたのだ。

「…そっか。何か、俺にできることがあれば、なんでも言って。力になるから」

「うん」

蘭は、悲しそうな顔でうなずいた。

「…さて！蘭姉ちゃん。忘れ物って？」

コナンは暗い雰囲気を消すために、努めて明るい声で言った。

「あ、うん。でも、もうちょっとお話しない？久しぶりに会ったんだし」

「あー、そうだね。ごめんごめん」

「ふふっ。それにしても、今日のコナン君、かつこ良かったなあ」

「もうその話題はよそうよ。ちょっと恥ずかしいよ」

「えー、いいじゃない。なんかコナン君、試合でも大活躍だって、歩美ちゃんが言ってたよ？」

「たまたまだよ」

「それに、サッカーだけじゃなくて、相変わらず、難事件をたくさん解決してるみたいだし。おともいも、新聞に載ってたじゃない。お父さんが嘆いてたわよ?」

「いやー、あはは…。それもまぐれ。たまたまだよ」

「モテモテみたいだし?」

「そんなことないって! 普通だよ、普通」

「…本当に、新一みたいだね」

「え?」

「スポーツ万能、博識多才、推理力はぴかいち。ね、新一そっくりじゃない」

「え、あ、あーっと…」

「極めつけは、その顔。ホントに、そっくり。新一の顔…」

「ははは…。俺は」

「…なんでしょ?」

「…え」

「新一なんでしょ?」

まっすぐな蘭の視線が、コナンの心を貫いていた。

「や、やだなあ。その誤解なら、もうずっと昔に解いたでしょ? 俺が、新一兄ちゃんなわけないよ。だって、新一兄ちゃんは今27歳のはずでしょ? 俺、まだ17だよ?」

わかりきったことを、冷静に、落ち着いて話すコナンだが、内心はひどく動揺していた。コーヒーを一口飲んだが、そのときコナンの手が震えていたのを、蘭は見逃さなかった。

「いいえ。あなたは新一よ。ずっと昔から気づいてた。でも知らない振りしてきたの。新一から話してこないってことは、何か事情があるんだって思ったから。…新一は気づいてなかったみたいけど、

私、あなたが小学一年生だった頃には、もう気づいていたわ。気づかないほうがおかしいわよね。あんなに頭の切れる小学一年生が、いるわけないもの。疑い始めてからは、事件のたびにあなたを観察してた。お父さんの後ろで、代わりに事件をとくコナン君をね」

蘭はコーヒーを少し口に含み、続けた。

「私、すごく悲しかった。なんでこんなに近くにいるのに、何も教えてくれないんだろうって。もしかしたら、私の反応を見て楽しんでるんじゃないかとも思った。遊ばれてるんじゃないかって。」

蘭はいったん話を区切り、悲しげな眼でコナンを見た。だが、その眼は、さまざまな感情が複雑に入り混じった、濁った色をしていた。

「だからあの時…。新出先生に告白された時、丁度いい機会だと思った。こんなひどい男をいつまでも待つてたって、しょうがない。色んな人に相談したら、みんな同じ答えが返ってきたわ。あの頃の私も、そう思ってた。あなたにどんな事情があるのかわからないけど、もう待つているのは限界だった。だから、新出先生の告白を受けたの」

コナンは言葉が出なかった。初めて聞く蘭の本当の気持ち。こんなに苦しんでいたなんて。コナンは、胸の内側の深い部分をナイフでえぐられているかのような感覚に陥った。

「そしたら、案の定、コナン君が見るからに挙動不審になって…。『やめたほうがいいよ、蘭姉ちゃん』とか、『新一兄ちゃんはどうするの?』とか、一生懸命私に訴えかけて…。でも、そのときのあなたの苦しみなんで、私の苦しみにくらべたら…。そう思ってた」

蘭はコナンの驚愕した表情を見てふふつ、と笑うと、さらに続けた。

「その様子じゃ、本当に気づいてないんだ…。平成のホームズも、女心には鈍感ってわけね」

蘭がいたずら好きの子供のような目でコナンを見た。

「まあいいけど…。それで、あの夕食の日から何日か経って、新――は私に電話してきた。私は受け答えしながら、そっとコナン君の様子を見に行ったら…。よっぱど動揺していたのね。お父さんが隣

で寝ているのにもかかわらず、携帯で私に話していることと同じことを話してた。しかも、声は新一。ここでもう、確信した。あなたが新一だって」

コナンは絶句していた。ばれていたのだ。とつくの昔に。コナンは頭を抱えてうつむいた。

自分は今まで…。何をしていたんだ…。自分の正体を知った人には、組織の毒牙が向けられる。そう思っただけで今までほとんどの人に正体を隠していた。それなのに、実はとうの昔に、それも、一番知られなくなかった人に、一番に知られていたのだ。

「さあ、白状なさい、新一。なんなら、証拠を持ってきましょうか？あなたが父さんの声で、事件を解決しているところの写真」

「いや…。もういい。すべて話すよ…。」

もしかしたら、ほっとしているのかもしれないな、とコナンは思った。これでやっと開放される。もう、欺かなくても良いのだ。

コナンは、今までのことを、包み隠さず、すべて蘭に打ち明けた。

「ふーん…。そんなことがあったんだ」

蘭はコナンの話を聞き終わると、改めて新一に向き直った。

「ああ…。本当にごめん。いくら組織から守るためとはいえ、ずっとほったらかしにしちまって。蘭の気持ちも考えずに。何度も打ち明けようとは思っただけ…。でも、わかってほしいんだ。あの組織は、みんな奪っていくんだ。お前を失ったら、俺は…」

新一はばつの悪そうに、うつむいた。

「うつん、いいよ。新一は私のためにしてくれたんだもん。私のわがまを通すわけにはいかないよ。ごめんね、新一」

新一は蘭に謝られたことに、思わず声を大きくした。

「はあ？何言ってるんだよ！どう考えても悪いのは俺じゃねえか！」

「違うよ。新一は私を守ってくれただけだもん。私は、何も知らない」

かった。新一がこんなに苦しんでるのに」

新一がふと蘭を見ると、蘭の眼にはうつすらと涙が浮かんでいる。

「蘭…？」

「新一が一人でがんばっているときに…。私ってば…。何考えてんだろ」

蘭が涙をぬぐって、さらに続けた。

「しかも、私ってば、時間が経つにつれて、また新一のことを思うようになった。いつのまにか、怒りは消えて、せつなだけが残ったわ。それは新出さんと結婚してからと同じだった。決して幸せでないわけではなかったけれど、どこか胸に大きな穴があいたような感覚があった。何かが足りなかった。それでやっと気づいたの。やつぱり、私まだ新一のこと好きなんだって。愛してるんだって」

まるで、せき止められていた洪水がいつきに流れでたかのように話す蘭。新一は言葉を失っていた。苦しんでいたのは、自分だけではなかったのだ。目の前で、大粒の涙を流して泣いている蘭もまた、長い間苦しんでいたのだ。

新一が言葉をかけようと近寄ると、蘭は涙を浮かべたまま、満面の笑みで新一を見た。

「私ね…。江戸川コナンとして、どんどん活躍していくあなたの情報は、常にチェックしてたんだよ。新聞の記事も、雑誌のインタビューも、全部家に保管してあるよ。でも、影で見ているだけじゃ、ぜんぜん足りなかった。最近、新聞やテレビで活躍しているあなたを見て、とうとう耐え切れなくなったの。すぐ近くに新一がいる。だったら、変な遠慮も、プライドも、強がりも捨てて、会いに行こうって思った。だから今日、新一を見に行ったのよ。そしたら…私たちがまだ高校生だった頃の新一がそこにはいて…。たまらなかった。声をかけずにはいられなかったの。…ふふふ、迷惑だったでしょ？」

「…そんなことねえよ。ちょっと驚いたけどな」

新一は頭をかきながら言った。自虐的に笑う蘭を見て新一は耐えら

れなかった。蘭はそんな新一を見て、心がとても暖まるのを感じた。蘭は立ち上がり、後ろからそつと新一を抱きしめた。蘭からは、新一がどのような顔をしているかはわからない。

「やっと会えた…。本当の新一と…。本当の新一に触れた…」

「…」

「ねえ、新一」

「うん？」

「私たち、やり直せないかな…」

「…蘭」

お互いに、誤解は解けた。二人の障害は何もない、蘭はそう考えていた。だが…。

「…わりい、蘭。もう、遅せえよ…」

「え」

今度は、蘭が言葉を失った。

蘭は、新一の肩をつかんで自分の正面へ向けた。

「…な、何で！？どうして!？」

「…俺、お前が新出先生と付き合うことになって、毎日がすげえつらかった。新出先生と付き合ってから、俺、すごい楽しそうだったからな。同じ家について、本当につらかったよ。何で自分はこんな体なんだ、何で蘭はあんなやつと…ってな。長い間、俺は無気力。探偵団のやつらにも、スゲー迷惑かけた」

「だからそれは」

「わかってるよ。…でも俺やつと…。やつとお前のこと、忘れることができたんだよ。あいつ等に、すごい助けてもらって。最近やつと。…お前のためならって。お前の幸せのためなら、仕方ねえって思えるようになったんだ。それに、お前はもう結婚してるじゃねえか。…お前とはもう」

新一はつらそうに話す。続きを話すが、とてもいやだった。こんなに傷ついていた蘭を、また自分が傷つける。新一の様子はまるで、ここから先は言わせないでくれ、と蘭に訴えかけるようであった。

蘭はそこまで聞いて、大声で叫んだ。

「何言ってるのよ！ようやく、ようやくお互いの気持ちがあったんじゃない！今からだって遅くはないわ！」

「…もう遅いんだよ、蘭」

「何で…。何でそんなこと言うのよ！何で…！……そっか。わかった。私みたいなおばさんじゃ、いやなのね？十歳も離れた女になんか！興味ないってのね！しかも既婚者！すでに汚れた私なんか、嫌なんだ！！」

「違う！そんなわけねえだろ！」

「じゃあ何なのよ！」

新一は、自分を落ち着かせるかのように深呼吸した。そして、何かを決意したかのような精悍な顔つきで、蘭の顔を見つめる。そんな新一の顔に、蘭は心がはねるような感覚がした。いやな予感がした。

「俺、好きなやついるんだ。高校に。だから、おまえとは、恋人になれない」

「…え？」

「…ごめんな」

蘭の中で、大事な何かが音を立てて崩れ落ちていった。

取り戻した幼馴染（前書き）

雑ですいません。

取り戻した幼馴染

「で？その後どうしたのよ」

「ああ。蘭のやつ、自分の荷物置いて走って家から出てったよ。…まあ、無理もねえよ」

蘭の突然の訪問から一夜明けた。コナンは今、学校に向かっている。登校時に一緒になった灰原に、昨日の出来事を打ち明けていた。

「彼女、あなたにそんなことを思っていたのね。…まあ、いずれあなたの正体はばれるとは思っていたけど、小学一年生の段階ですでに知られていたなんて。特にあなたに対する態度が変わったようには見えなかったけど」

「そうなんだよ。一番近い俺ですら気づかなかったんだ。…あいつ、ずっと一人で苦しんでいたんだよな。そう考えると…」

コナンの声はどんどん小さくなっていく。弱音を吐いたコナンに対し、灰原はコナンの行くてを阻むようにして前に来ると、にらみつけて言った。

「なにうじうじしてんのよ。そんなに後悔しているのなら、彼女の願いを叶えてあげれば良かったでしょう？まさかあなた、本当は年の差なんてつまらないこと気にしてるんじゃないでしょうね」

「それは違うつてば！」

「ホントかしら？なら教えなさいよ。あなたが惚れてる人。私が知ってる人なの？」

コナンは今までとは打って変わって、からかうように、半眼に微笑を加えて灰原を見た。

「ほー？あの灰原さんともあるうお方が、人の色恋沙汰に興味があるのか？お前もまるくなったもんだ」

そう言って、笑顔で灰原の背中を二、三回軽くたたいた。

「喧嘩売ってんのかしら？工藤君」

「ハハハ…」

コナンと灰原がいつものようなやり取りをしていると、

「コナンくん、哀ちゃん！」

元気な声が聞こえた。二人が振り返ると、歩美、元太、光彦のいつもの三人が走ってきていた。

「この話はいったんお預けね」

「ああ、そうだな」

二人の意味深な言葉に、

「…また二人で秘密の話？コナン君」

「またですかコナン君！？」

「俺たちがいなくなったら、きっとお前友達いなかったぞ、コナン！」
歩美、光彦、元太がとがめるように言った。

「いや、はは…。（何で俺だけ？）」

コナンは苦笑いしかできなかった。

（相変わらずね、工藤君）

灰原はため息をついた。

五人はいつものように、騒がしく話をしながら学校の中に入っていた。

「はい、注目！！」

朝のホームルーム。コナンのクラスの担任が、まだ騒がしい教室内へ向けて、大きな声でそう言った。

「産休をとっていた副担任の山下先生に代わって、今日から臨時の先生が来てくれます。紹介します、新出蘭先生です」

「え？」

探偵団は五人同時に反応した。

（まさか…）

「先生、どうぞ」

ドアがゆつくりと開く。そこから出てきたのは――

「みんな、はじめまして。新出蘭です。担当は山下先生と同じ、国語です。たくさん失敗すると思うけど、大目に見てやってね？どうぞよろしくお願いします！」

――紛れもなく、五人の知るその人であった。

「蘭さんじゃないですか！」

「うわー、蘭お姉さんだ」。昨日学校にいたのって、先生になるための手続きだったんだね」

「すっげーなあお姉ちゃん。男はみんな見とれてんじゃねえかよ。

でもよ、あの姉ちゃん来てくれて、お前もうれしいだろ、コナン！」

そう言っつて、元太は後ろに座っているコナンの方を見る。それに続いて、光彦と歩美もコナンの方へ振り返った。だが、コナンは眼を見開き、驚愕した表情で蘭を見ていた。

「…コナン君？どうしたの？」

異変に気づいた歩美が声をかける。だが、コナンは反応しない。

「コナン君？ねえ、コナン君？」

「…ん、あ、ああ。悪い。何だ？」

「どうしたの？蘭お姉さんが来てくれたのに、そんな顔して…あ、解った！ほかの男子に蘭お姉さん取られないかって、ひやひやしてるんでしょ！」

「あ、いや、はは…」

「もう。蘭お姉さんが結婚しても、コナン君はお姉さんっこなんだね。でも、そういうところ、かわいいよ！」

「はは…」

コナンにとって、今はそれどころではなかった。
灰原は、コナンの気持ちを知ってかし知らずか、声をかけることもなく、ただ事態を見守っていた。

蘭は、五人の方を見て、にっこりと笑った。

コナンはその笑みが、ひどく不気味に感じた。

ホームルームが終わり、一時間目の準備に入る。コナンは、教室から出て行った蘭を追って教室を出た。

「新出先生！」

声に気づいた担任と蘭が驚いたように振り返った。

「江戸川君。どうしたの？」

「先生、ちょっと新出先生とお話があるので」

「あらそう。でも江戸川君？いくら君がモテるからって、年上をそう簡単に落とせるなんて思っちゃだめよ？」

「そんなんじゃないません！」

ほほほ、と貴族の女性のように笑って、担任は職員室へ歩いていった。

「まったく…。で、蘭。なんでここに」

「新」

コナンの言葉をさえぎるように、蘭は呼びかけた。その眼は、まっすぐコナンを捉えていた。

「な、なんだ？」

「新出先生、なんて呼ばないで。次からは、蘭先生、って言ってね」
「…わ、わあったよ。で、蘭先生、なんでここに？」

コナンは蘭の得体の知れない威圧感に圧されながらも、なんとか質問した。

「私、教員資格持っていたじゃない？最近、家にいてもつまらないし、思い切って働こうと思って。あの人も許してくれてたし」

平然とした顔で蘭は話した。その顔を見る限り、昨日の出来事など

まるで気にしていないように、コナンには見えていた。
（何考えてんだ…？）

蘭の図ったような明るさに、コナンは疑問を隠せなかった。

「それに、ここならいつでも新一を見ていられるしね」

蘭はまたにつこりと笑う。心の底から喜んでるように見える。

コナンは先ほども、この笑みが不気味で仕方なかった。

「あ、あのな、蘭、昨日も言ったけど」

「わかってる。その先は言わないで。時間がないから、今はもう行くね。悪いけど、放課後、部活終わったら、職員室まで来て。その後、ゆつくり話そう。ね？」

蘭が寂しそうにそう訴えた。

「…ああ。そうだな」

確かに、コナンも一度じっくりと話し合っべきだと考えていたので、願ってもいない申し出であった。

「じゃあね、新一」

「あ、ああ」

コナンは蘭の笑みの謎を抱えたまま、蘭と別れた。

サッカー部の練習が終わった。コナンは結局、蘭との話の内容が一日中気になって、勉強にも部活にも集中できなかった。

（今日のうちに、必ずアイツと元の幼馴染の関係に戻ってやる。）

コナンはそう思っていた。

「そう上手くことが運ぶかしらね」

「え？」

どうやら、コナンは無意識のうちに思っていたことを口に出してしまっていたようであった。コナンの独り言を聞いた灰原は、皮肉た

つぷりな笑みを浮かべていた。

「どういう意味だよ、灰原」

コナンの質問に、一度ふん、と鼻を鳴らしてから

「あの子、どう見たって諦めが悪いもの。昨日のことぐらいでめげる女じゃないわ。…それにきつと、彼女は信じてる、いや、確信してるんだわ。最終的に、あなたと彼女はきつと結ばれるってね」

と、一気に言った。

「へー…。そうなのかな。でも、お前がなんでそんなことがわかるんだよ」

「…。あなたが私をどう思っているか解らないけど、私も一応女なのよ？あなたよりは女の気持ち、理解してるつもりだけど？」

コナンの言い草に、灰原がムツとした表情でそう言った後、あさつての方向を向いた。

「おいおい、怒んじゃねえよ。…はいはい、すいませんねえ、オメーは素晴らしい女性ですよ。変なこと言って申しあげございませんでした。…これでいいんだろ」

「…やっぱり喧嘩売っているようね」

棒読みでまったく感情がこもっていないコナンに対して、灰原が冷たく言い放った。

コナンが灰原の怒気に圧されていると、「コナンくん、哀ちゃーん。帰ろー」と、明るい声が聞こえてきた。

「ああ、悪い、歩美！俺、先生に呼ばれてっから、オメーら先帰っててくれー！…お前もだぞ、灰原」

「解ってるわよ。別にあなたたちの邪魔をする気はないけど…。少し、慎重に彼女と接するべきね」

灰原の言葉に、コナンは驚いて彼女を見る。

「えっ。お前もそう思うか」

「ええ。理由は定かではないけど…。とにかく、嫌な予感がするから」

「ああ、解ってる。：俺たちがこういうこと感じるのも、組織と何
度もやりあってきたからだだよな。その辺だけはうれしく思うぜ」

「馬鹿なこと言ってるんで、さっさと行きなさい。まったく」
あきれた、とても言うように、灰原は肩をすくめた。

「はいはい。じゃあな、灰原」

「ええ」

コナンは校舎に戻っていった。

入れ替わるように、歩美が灰原の元へやってくる。

「哀ちゃん、コナン君もああ言ってるし、帰ろう?」

「ええ。そうね」

灰原は、離れていくコナンの背中を見て、不安がどんどん大きくな
っていくのを感じた。

「失礼します。：ってなんだ、蘭だけか」

コナンが職員室に入ると、そこにいたのは蘭一人であった。蘭はコ
ナンを確認すると、作業を中断し、笑顔でコナンに話しかける。

「新一。来てくれたんだ。今日は先生たちみんな『飲み』だつてさ。
私は断ったけどね」

蘭は困ったようにまた笑った。

「いいのか、教員一日目に、先生方に付き合わなくて。俺は別に、
明日でも良かったんだぜ?」

「ううん、いいの。私が、今日話したかったの」

そういつて、蘭はスッとコナンの眼を見つめた。コナンは一瞬身じ
るいだが、しっかりと蘭の視線を受け止めた。逃げちゃいけない、
コナンはそう思っていた。

「新一」

「なんだ？」

「私ね、もう、新一のこと、諦めたよ」

「え？」

「幼馴染のままでいい。ずっと。…新一に、迷惑かけられないしね。あなたが、そばにいればそれでいい。今、そう思えるの」

蘭が悲しそうな眼で、切なそうな声で、コナンに言った。

予想外であった。直前に灰原に言われたこと、それはコナンも思うところがあった。だから、蘭がいくら自分を引きとめようとも、すっぱりと断ろう、そう思っていた。

だが、蘭は、あっさりと引いていった。何も抗議せず、何も要求せず、ただ引いていった。

顔を見れば、我慢していることは明白である。きっと、本当はたくさん言いたいことがあったはずだ。だが、それらを全て自分の中に封じ込めて、コナンの気持ちを優先したのだ。そのことは、すぐにコナンに伝わった。

蘭の悲しそうな眼と、耐えるように震える唇は、はつきりと眼の奥に焼きついた。

「…そうか」

コナンは後悔した。蘭を不審に思い、不気味に思った。蘭を信じてやれなかった。そのことが、とても恥ずかしい。実際の蘭は、こうして、自分を考えてくれている。

思えば、昔からそうであったではないか。昔から、我慢強く、優しく、想いやりがあった。自分はそこに魅かれたのではなかったか。

蘭という人間を再確認できて、後悔する反面、コナンはうれしい気持ちにもなった。

そんなコナンの心の変化を読み取ったのか、蘭も優しい表情に変わ

った。

「…でも、友達でいるくらいならいいでしょ？昔みたいに」

「ああ。当たり前だろ。これからずっと、友達だよ」

「うんっ！私、新一と新一が好きだって女の子、応援したげるね。

まあ、新一みたいな推理オタク、無理だろうけど」

「あん？ひどい言い方だな。見てやがれ、探偵に不可能はねえ！」

「どうだか」

蘭とコナンは二人で笑いあった。コナンは自分の願いがなかったことがとてもうれしかった。蘭とまた幼馴染の関係に戻れたことが。

コナンの願いは蘭に届いていない。

コナンが蘭の本当の想いを知るのは、もう少し先になる。

裏側（前書き）

僕は、蘭ってむっつりだと思います。新一もむっつりだけど、蘭も負けず劣らずのむっつり。よく妄想するし。

ちなみに、赤木量子の話を読んで、「蘭ってこんななんだ」って思っ
て、ヤンデレもありかな、と思いました。

裏側

しばらく二人は職員室で他愛のない話を続けていたが、ふいにコナンは自分の家にある蘭の荷物について思い出した。

その事を蘭に話すと、蘭はコナンの家まで取りに行きたいと言う。時間が時間なだけに、最初は蘭を連れていくのを嫌がったコナンだったが、仲直りしたばかりであつたため断りずらく、結局来てもらうことにした。

「やっと暖かくなってきたね。」

「まあ、もう五月だしな。」

コナンと蘭は今、コナンの家に向かっている。蘭は免許を持っていないため、通勤も徒歩だという。

「オメー、免許取った方が良いんじゃないか？毎日歩くのなんて大変だろ？」

「まあ、失礼ね。私、そんなにおばさんじゃないわよ。」

コナンの言葉に、蘭がいじけたような表情でコナンを見て言った。だが、その顔はどこか嬉しそうだ。

「いや、別にそういう意味で言っただんじゃねえよ。」

「ホントにー？ふふっ、でも不思議。なんだか、新一とコナン君、二人いっぺんに話してるみたい。」

そう言つて、蘭は背伸びしてコナンの頭を撫でる。

「お、おいおい…。勘弁してくれよ。」

「ふふふっ。」

蘭はまた楽しそうに笑う。そんな蘭を見て、コナンは『蘭と元の幼なじみの関係に戻る』という、今日の目的を達成出来た実感が湧いて、つられて笑顔になっていた。時間はごく穏やかに流れていた。

話をしている間に、コナン達はあつという間に工藤家に着いた。

「じゃあ、取ってくるからちよつと待ってる。」

そう言つて、コナンは家に入ろうとする。

「あつ、待つて。新一、ご飯まだでしょ？仲直り記念に、私作つてあげるよ。」

「え？で、でもよ…。お前、あんまり遅くなるとまずいんじゃないのか？」

「大丈夫だよ。家にはもう連絡してあるから。ね？はい、お邪魔します。」

「お、おい！」

強引に、蘭は家の中に入って行つた。

「まったく…。」

コナンはため息をつきながらも、特に嫌がるそぶりは見せない。蘭の、自分に対する妙なよそよそしさがすでに無くなったという事が、とても嬉しかった。

蘭は終始笑顔で新一が夕食を食べている姿を眺めていた。

「…何だよ。俺の顔になんか付いてんのか？」

「ううん、別に。それより、おいしい？」

「まあな。小学校以来だな、お前の飯食うの。久しぶりに食ったけど、やっぱりうまいよ。」

コナンはぶつきらばうに、眼を逸らして言つた。その時、ふと時計が目映る。

「本当？ありがと。」

「ん、ああ。それより蘭、お前時間いいのか？」

蘭はちらつと時計を見やると、すぐに新一へ視線を戻した。

「ん。…うん、もう少し大丈夫かな。それより新一、ちょっと汗くさいよ。お風呂入ってきなよ、待ってるからさ」

「え…そ、そうか？わかった。」

急に話題を変えたことに、コナンは疑問を感じたが、今朝のこともあり、あまり深く考えないようにした。

新一は不思議そうな顔をしてお風呂に向かっていった。

さて、新一の家に来たのは、今からすることのためだ。確かに、新一との久しぶりの会話はとても楽しかった。高校生に戻ったみたいだった。

今日再確認した。私は、やっぱり新一が好きだ。たぶん、あの人よりずっと好き。

新一と話していると、心があつたかくなっていくのがわかる。心が満たされるっていうのかな。今日だって、昨日あんなに取り乱した私に対して、最初は不審に思ってたみたいだけど、すぐに昔の接し方に戻ってくれた。それがとても嬉しい。私に向けるあの笑顔は本物だった。それがとても嬉しい。

うん、私はやっぱり新一じゃないとだめだ。…確かに、あの人は優しくとてもいい人だけど、やっぱり新一にはかなわない。ごめんなさい、あなた。そして、ごめんね、新一。ずっと放っておいても、これからは、ずっと、ずっと見てるからね。あなたのこと。今日の感じからすると、まだまだ私にはチャンスがありそうだ。というか、新一も気づいてるんじゃないかな？あなたの隣に一番ぴつたりなのは、この私だってこと。あなたが好きだって言っている人それは誰だかわからないけど、新一のことを一番良く知っているのは、私で、その人じゃないわ。まあ、怪しいのは歩美ちゃんとか、哀ちゃんとかだけだ…。

というかそもそも、新一が本当に私以外に好きな人がいるか、それ

すら怪しい。ここまで待たせた私に対する、一種の仕返しのために、『俺好きな人いるんだ』なんてしゃれにならないこと言っているのかもしれない。

それはわからない。でも、今現在、新一に私以外に好きな人がいたって、結局は私と結ばれる。そうに決まってるわ。

でも、そうなるためには、まず新一のことを知らなくちゃ。何せ、離れていた時間が長かったから、新一の身の回りについて、そして新一本人について、知らなくちゃならない。知らなきゃ、対策を立てるのが難しいしね。

私は、今日持参してきた盗聴器を取り出す。この盗聴器を、家のいたるところに仕掛ける。本当は、監視カメラも付けたいんだけど…。新一の場合、気づく恐れがある。新一相手に、油断は禁物だ。

これで、誰か女がやってきても解る。誰かとする秘密の話も、すぐに解るわ。

ちなみに、決して、新一のプライベートを覗いて楽しもうなんて思っていない。もちろん、そんなこと思っていないわ、うん。あくまで対策を立てるためよ。ホントに。

まあ、四六時中聞くわけには行かないから、私は何かしら理由を付けて、新一の家に通い詰める。万が一、行けないときに限り、チェックするでしょう。

…あの人とは、いずれ別れる日が来るだろう。覚悟はできている。お世話にはなったが、少しうらんでもいる。あんたが私に妙なことを言わなければ、私は新一を裏切らずにすんだ。ずっと新一といわれたんだ。そう考えると、離婚してもいいや、ってすごい気が軽くなる。

新一、あなた本当に私があなただのことあきらめたと思っているの？

知っているでしょう、私、あきらめ悪いんだよ。あなたを、私のものにする。絶対。もう、失敗はしないわ。

ああ、早く新一と二人で暮らしたい。あなたを思うだけで、こんなに切ないんだよ。胸が張り裂けそうになるの。いつそ、私の全部を奪ってほしい。

ああ、新一、新一、新一い！

体が熱くなった蘭は、盗聴器をもって、真っ先に新一の寝室に向かった。

新一は、気づいていない。

「おい、蘭。帰ったのか？」

コナンが風呂から上がると、リビングに蘭はいなくなっていた。夕食の食器も、そのままである。

「おい、らん！」

「…はい！」

蘭が二階から降りてきた。

「なんだ、いるじゃねえか。ん？オメー、顔赤くねえか？」

「う、うん。ごめん、新一。勝手に部屋掃除しといたよ。」

「はあっ？オメーなあ…。」

「もう、ごめんって言うてるでしょう？というか、あんな乱れたベッドでよく寝てられるね。」

「なっ！？オメー、寝室にも入ったのかよ！」

コナンは頭を抱えた。確かに、遠慮がなくなったことはコナンも素直に嬉しいのだが、今回の単なるプライバシーの侵害のように思える。

「直してあげたから、ありがたく思いなさいよ！それより新一、私

そろそろ帰るね。悪いけど、食器は自分で洗ってくれる？」

「ああ。飯作ってもらったうえに、皿洗いまでやらせられねえよ。晩飯、ありがとな。」

「うん。…ねえ、新一、たまには遊びに来ていいかな？」

懇願するように、上目づかいで新一を見る蘭。その顔には、高校生にはない、妖艶な何かが含まれている。

心の中ではまずいと思っているコナンだったが、昔からこの顔が苦手で、この顔で頼まれると、断れなかった。

「…まあ、たまにはな。でも、ホントにたまにだぞ！新出先生に申し訳ないから。夜遅くに、自分の嫁が男の家にいるなんて、面白くないだろ。」

「うん…。」

蘭は寂しそうにうなづく。

「…でも、その男が家族同然の男だったら、別にかまわないと思うわ。ね？コ・ナ・ン・君？」

「はは…。」

コナンは、先ほどの寂しそうな顔から、無理やり笑顔を作って見せた蘭が、急に忍びなく思えた。やはり、まだ傷は癒えていないのかもしれない。

それでも、コナンには彼女を受け入れることができない。受け入れることは簡単だが、それでは決して長続きしないだろう。第一、自分は今蘭のほかに好きな人がいるのだ。

蘭を救えないことが、もどかしかった。

「じゃあね、新一。」

「あ、送ってくか？」

「ううん。いいの。タクシー呼んだから。」

そう言って、蘭は振り返らずに新一の目の前から去っていった。やり遂げて満足げな顔を、コナンに見せないように、早足で。

裏側（後書き）

「お前、『コナン』か『新一』か、呼び方どっちかに統一しろよ！
わかりづれえよ！」って思っている方もいると思いますが、基本『
コナン』で、何か特別なことがあれば『新一』になります。勝手に
すいません…。

キャンプ？（前書き）

コナン読み返してます。
おもしろいです。

キャンプ？

「はあー。」

国語の授業中、コナンは深い深いため息をついた。
原因は蘭である。

蘭がコナンの家を訪問して、早くも一週間が経過した。蘭は結局、あの日から毎日、コナンの家に足を運んでいる。何かしら理由を付けてやってくる蘭に、コナンはすでにお手上げと言った感じだった。
(あいつ、どういふつもりなんだ・・・？)

『平成のホームズ』と呼ばれる彼でも、蘭の心の中まで推し量るのは難しいようであった。

「何よ、ため息なんかついて。うるさいんだけど。」

隣に座る灰原が、いかにも迷惑そうな顔でコナンを見る。

「っせーな、俺にもいろいろあんだよ。」

コナンが小声で呟く。

「蘭さんがあなたの家に通い詰めてることとかかしら？」

灰原が、いつもの皮肉な笑顔を浮かべて、コナンにだけ聞こえるように言った。

コナンは眼を見開く。

「げっ！お前、知ってたのかよ！」

「まあね。一応、隣に住んでるんだもの。それに、毎夜毎夜あんなに激しい声出してれば、気付かない方がおかしいと思うけど？」

「・・・変な言い回しすんなよ。ただ二人で騒いでただけだろ。誰かに聞かれたら誤解されんだろが。」

「何の話かな、コナン君？」

急に現れた声の主に驚いて、コナンの体が大きく震えた。

コナンたちの目の前に、満面の笑みを浮かべた蘭が立っていた。

「ら、蘭！姉ちゃん……。じゃなくて、蘭先生……。」

しどろもどろのコナンに、クラスから笑い声が上がる。

「まったく。授業に集中しなきゃ駄目でしょ？哀ちゃんみたいなかわいい女の子とおしゃべりが楽しいのはわかるけど、今は国語の授業なんだからね？」

蘭の言葉に、また笑い声が上がった。

（本当に、何考えてんだよ）

笑い声の中、コナンはまた、ため息をついた。

学校と部活が終わり、コナンが家に帰ると、蘭の姿はなかった。

ここ最近では、家に帰ると「おかえりー」という弾んだ声と共に家の中から蘭が現れ、

「お腹減ったでしょ？ご飯食べよ。」

と、当然のように夕飯を作って待っていたのだ。

暖かい食べ物があることは素直に嬉しかったのだが、毎日押しかける蘭にはさすがに頭を抱えていた。

だが、どうやら今日はいないようだ。

（やっとわかったか……。？それとも、旦那に叱られたかな？）

注意される蘭を思い浮かべて、コナンは苦笑いを浮かべた。
乱暴に靴を脱ぎすて、そのまま風呂場へと向かった。

風呂から上がり、遅めの夕食を取っていると、携帯が震えた。
灰原からの電話だった。

「はい、もしもし。」

『今日は彼女いないみたいね』

「第一声がそれかよ……。で、なんか用か。」

『博士が久しぶりにキャンプに行きたいって。あの三人は行くみたいだけど。あなたはどうする？』

「キャンプか……。あいつらも好きだね……。で、お前は行くのか？」

『あら、なーに？もしかして、『灰原が行くなら行く』とか言うのかしら？そういうことなら、行ってあげても良いわよ？』

「バ、バーロー！なんじゃねえよ！まあ、最近部活ばかりで遊んでねーし。た、たまにはキャンプもいいかな。」

『ふーん。……なんか今日の工藤君、かわいいわね。』

「う、うつせーな。いいから、さっさと時間と場所教えるよ。」

『明日の9時に、私の家の前よ。ちなみに、キャンプ場は××キャンプ場。』

「わかった。……××キャンプ場って事は、川で釣りだな？」

『ええ。それ相応の服にしてくださいよ？』

「んなこと言われなくても分かってるっつもの。」

『あらよかった。じゃあもう用件も言っだし、切るわね。おやすみなさい。』

「え？お、おう。」

電話はあっさりと切られた。

「まったく、あいつは…。」

コナンは真っ赤な顔でそう呟く。

（俺はいつになったら、素直になれんのかね…。）

ぼんやりと、そんなことを考えていた。胸が締め付けられるような感覚になる。

（あいつは俺の事、どう思ってたんだろうな…。）

灰原の皮肉に満ちた笑顔を頭の中に思い浮かべた。その表情からは全くわからない。

（俺も蘭と同じだ。…人の事言えねえな。）

コナンは苦笑いしたあと、自棄になったように残りの夕飯を掻き込んだ。

「明日、××キャンプ場か…」

蘭はイヤホンを耳から話すと、ゆっくりと階段を下りる。

リビングでは、新出智明がなにやら書類に眼を通していた。

「あなた。」

突然現れた声に驚いたように、大げさに智明は振り返る。

「何だ君か。どうしたんだい？」

「明日、診療所も、あなたの高校の部活動も休みだったわよね？」

「うん、そうだけど？」

「久しぶりに、どこかへ行かない？…そうね、キャンプとか良いんじゃないかしら。園子と京極さんも一緒に。」

「キャンプか…。うん、面白そうだね、行こうか。」

「良かった。じゃあさっそく、園子に電話するね。」
蘭はそう言つて、すぐにまた二階へ上がっていった。

その顔に歪んだ笑みが浮かんでいたことを、智明は知らない。

「新一。そのトマトジュース取ってくれんか。」

「ほらよ。ってか、新一って呼ぶなよ博士。」

「おお、すまんすまん。」

前と比べて、見るからにシワが増えた阿笠博士が、いつもの優しそうな顔で謝った。だが、いつもより明るくなつたと灰原は言う。最近、探偵団と顔を合わせていなかったので、こうしてまた集まったことが嬉しいのだろうか。

コナンがそんなことを考えていると、

「いやー、川辺で食う魚つてうめえよな!。」

と、元太が幸せそうに言う。

「元太君はいつも美味しそうにたべますね。」

「だよ。昔から全然変わってないんだから。」

光彦、歩美がそれぞれ茶化すように、意地悪な笑みを浮かべて言つた。

「あんまり食べてばかりだと、博士みたいになっちゃうわよ。」
灰原も追い撃ちをかけるように言う。

「うーん、こんなくだらなないじいちゃんにはなりたくねえなあ。俺も気をつけねえと。」

「こ、これこれ元太君。」

五人からどつと笑いが上がった。

「それより、今回は大丈夫ですかねえ。」

「ん？何がだ、光彦。」

光彦の心配そうな声に、コナンが反応する。

「いや、だって…。コナン君と一緒にキャンプに行くと、高確率で事件に遭遇するじゃないですか。」

「ああ、確かに！でも、それでこそそのコナン君だよ！」

光彦の言葉に、歩美も嬉々とした声で賛同した。

「おいおい…。俺は死神だよ。」

「あら？上手いこと言うわね、江戸川君。」

また笑いが起こる。

楽しい昼の一時は、あっという間に過ぎていった。

「結構楽しんでるみたいね。」

「あん？」

地べたに直接座り、川ではしゃぐ三人を見ながら食後のコーヒーを飲んでいるコナンへ、灰原が話かけた。

「昨日はそんなに楽しみでもなさそうだったのに。」

「まあ、昨日は『高校生にもなってキャンプかよ』って思ってたけど…。いざ来てみると、案外楽しいもんだな。」

「なら、博士に御礼、言つときなさいよ？今日の段取り、全部博士がやってくれたんだから。」

「ああ。博士には感謝してるよ。今日だけじゃなく、今まで沢山世話になったしな。それに、博士だけじゃなく、あいつらにもさ。」
そう言つて、コナンは阿笠博士と元太、光彦、歩美を優しい目で眺めた。

「…そう。あの子たち、それを聞いたらきつと喜ぶと思うわよ。」

灰原も、いつもの表情とは違った、暖かい笑顔を返す。

「…お前にもな、灰原。」

「え？」

予想外の言葉だったのだろうか、灰原は目を丸くした。

「お前がいなけりや俺、今みたいに笑っていられたかわかんねーよ。だから、その。あ、ありがとな、灰原。」

コナンはぶつきらばうに、だかはつきりと言った。その顔は真っ赤に染まっている。

コナンは恥ずかしさで灰原を直視できなかった。

「…顔、赤いわよ、工藤君。」

しばらくの沈黙の後、不意に灰原が口を開く。

「…っせーな。夕日のせいだよ。」

「…まだ二時よ。」

「うつ…。」

「…ありがと。そんな風に言ってくれて。」

「え？」

コナンが驚いて灰原を見る。

灰原の澄んだ眼に、コナンは思わず見とれてしまう。

「私も、あなたの存在には感謝してるわ。いいえ、むしろ私の方が、あなたがいてくれて助かっている。本当に、ありがと。工藤君。」

コナンとは違い、すらすらとしゃべる灰原。

普段と違う灰原の雰囲気、コナンは戸惑っていた。

いつもの灰原であれば、こんな素直な物言いをすることはない。

笑顔も、いつもより柔らかかった。

（か、かわいい…。）

コナンはのどを鳴らす。

心臓の鼓動が速くなる。

自分の想いを全て打ち明けたい思いにかられる。
頭はすでに、正常な機能を失っていた。

（ええい、言っちゃまえ！）

「は、灰原！あいな！」

言いかけた、その時だった。

「あれ、コナン君じゃない！」

「え？」

まるで図ったように、蘭が現れたのは。

「ら、蘭姉ちゃん！なんでここに？」

よく見ると、蘭のほかには新出智明、鈴木園子、京極真、そして園子と真の子供の真二が園子に大事そうに抱えられていた。

「あのね。今日たまたま私と智明さんの休みが重なったから、久しぶりにどこかに行こうって事になってね。で、ついでに園子夫婦も誘って、四人でキャンプしようと思ったの。」

「そ、そうなんだ。でも、偶然だね。」

「ふふ、そうね。」

楽しそうに笑う蘭を見て、コナンは、胸の中に得体の知れない、何か粘着質のどろどろとしたものが纏わりつくような、不気味な違和

感を感じた。

（本当に偶然なのか…？）

「いやー、それにしてもあのガキンちょが、こんなに大きくなるなんて、時の流れてるのは恐ろしいねえ。ねー、真二。」

すっかり母親が板についた様子の園子が、真二に言う。

「はは。それにしても、久しぶりだね、園子姉ちゃん。それに、京極さんと新出先生も。」

「そうだね。コナン君、たまには遊びにおいでよ。蘭も喜ぶだろうし。」

そう言つて、智明は優しく微笑んだ。

その笑顔に、コナンは罪悪感を感じずにはいられなかった。

その後、結局全員で一緒にキャンプをすることになった。

特別な事件は何もなく、コナンたちは楽しく過ごすが――

それは、メンバーのほとんどが寝静まった、深夜に起こった。

キャンプ？（後書き）

蘭も灰原も、とってもいい子ですよ。どっちも好きです。
どっちも幸せになって欲しいな！。

キャンプ？（前書き）

エロ注意です。

キャンプ？

深夜。

深い眠りについていたコナンは、携帯のけたたましい着信音で眼を覚ました。

「…んー。コナン君、うるさいですよー。」

光彦も起き上がり、眠気も混じった不満そうな声を漏らす。

幸いだったのは、起きてしまったのが光彦だけだったということだろうか。

携帯の液晶には、『蘭』という文字が浮かび上がっている。

コナンはため息をついた。

「悪いな光彦、起こしちまって。ちょっと出てくる。」

コナンは一応光彦に自分が外に出ることを伝えて、テントの外に出る。

「…もしもし？どうしたんだよこんな遅くに。」

『あ、新一。やっと電話出てくれた。』

「ああ、それは悪かったから、要件は何だよ。」

夜遅くに起こされたからであろうか。コナンも少し機嫌が悪かったため、面倒くさそうに蘭に言う。

『もう、そんな意地悪しないでよ…。ねえ、今から私のテントに来てくれない？お願い。』

「はあ？」

コナンはあきれた声を出す。

「あのなあ…。行けるわけねえだろうが。だいたい、智明さんはどうしたんだよ？」

『明日仕事だからって、帰っちゃったよ…。ねえ、お願い。ちょっと怖い。』

「お前、27にもなって、情けねえこと言ってるじゃねえよ。つか、智明さんと一緒に帰ればよかっただろ。」

『だって…。キャンプ楽しみにしてたし…。』

蘭の今にも泣きそうな声が、コナンの耳に入る。

「ったく…。とにかく、俺は行けねえよ。教師と教え子が、こんな夜遅くに狭い空間に二人きりでいたとなっちゃ、誰かに知られたら変な誤解されちゃうよ。」

『じゃあ、ばれなきゃいいのね?』

「あんなあ!」

蘭のまるで子供のような言い草に、コナンは思わず声を荒げる。

「まず、俺は無理だから。そういうことは、園子に頼めよ!」

『だめだよ。せっかく家族水入らずで遊びに来てるんだもん。邪魔はできないよ。…ねえ、お願い新一。こっち来て?私が怖がりなの、知っているでしょ?』

コナンは頭を抱えた。こうなった蘭はもう何を言っても無駄だということを、コナンは知っていた。ここで粘っても、埒が明かない。

「…わかったよ。今そっち行くから。…お前が寝るまでだぞ。」

コナンは不機嫌そうに、低い声で話す。

「うん!ありがと!」

対照的に、まるでおもちゃを与えられた小さな子供のように、嬉々とした声で蘭は答える。

そんな蘭の様子に、コナンはまたため息をついた。

蘭のテントの前についたコナンだったが、なかなか中に入れずにいた。

先ほど電話で言っていた、「こんな夜遅くに男女が密室で二人きり」という状況を、コナンは強く意識してしまっていた。幼馴染とはいえ、相手は27歳のオトナの女性。健全な高校生であるコナンにとって、意識しないというほうが難しいことだった。

（ええい、何考えてんだ俺！相手は蘭だ。普通にしていれば、何も問題ないじゃねえか！）

一度両手で頬をたたき、声を出した。

「おい、蘭。来たぞ。」

深夜であるということを気にして、努めて小さい声を出す。

するとすぐに、ハーパンツにTシャツというラフな格好の蘭が姿を現した。

蘭の無防備な格好に、また心臓が高鳴るが、コナンは無理矢理冷静を装う。

「もう、遅いよ。まあいいわ。さ、入って入って。」

テントの中は、本当に蘭だけであった。コナンが座ると、それにあわせて蘭もコナンの正面に座る。

「ごめんね。こんな遅くに。」

「まったくだぜ。」

コナンが軽口をたたく。

「もー。こんなきれいな女が怯えて待ってたんだから、優しい言葉の一つもあっていいんじゃないの？」

「わかったわかった。別に気にしてませんよ、まったく。…それにしても、オメーの怖がりはいつになったら治るんだよ。」

「うーん。もう一生治らないんじゃないかな。だから、そのつどよろしくね、名探偵さん。」

「おい、開き直ってんじゃねえよ。」

蘭はクスクスと楽しそうに笑う。その笑顔を見て、コナンもまた笑顔になる。いろいろと思うことはあったものの、こうして楽しく語り合える関係に戻れたことが、素直に嬉しかった。

「そういえば、昔もこんなことなかったか？確か、俺たちが小三くらい的时候に……」

「あ、新一も覚えてたんだ。あの、宿泊研修の時でしょ？」

「そうそう。オメー、『友達に怖い話されたから、一緒に寝ようよ』とか泣きついてきてよー。」

「なっ！失礼ね、泣いてなんかないわよ！」

「いーや、泣いてたね。」

「な、泣いてないってばあ！」

二人は楽しげに語り合う。くだらない話や、恥ずかしい過去の話など、二人の話題は尽きることがなかった。時間はあっという間に過ぎていった。

蘭との談笑を楽しんでいたコナンだったが、ふと時計に眼をやると時刻はすでに深夜三時をまわっていた。コナンとしては、そろそろ切り上げたい頃だった。

だが蘭はどう見ても寝る気はないように見えた。むしろ、話せば話すほど、楽しさがにじみ出てきている。

「それでね、園子ったら、」

「あ、悪い、蘭。俺、そろそろ戻らねえと。明日も早いんだよ。」

「えー、いいじゃん、徹夜しちゃいなよ。」

「んなことしたら、明日体がもたねえよ。約束通り、お前が寝るまではいてやつから、さっさと寝ろよ。な？」

コナンが諭すように言う。すると蘭もあきらめたのか、素直に寝袋

の中に入った。

十分ほどが経過した時、蘭が突然話し出した。

「ねえ、新一？」

眠気が襲ってきていたコナンは、その声で眼を覚ます。

「ん、何だ？」

「今日、私たちと最初に会ったとき…。哀ちゃんと何を話してたの？」

「え？」

コナンの眠気は一気に吹き飛んでいた。コナンの顔が一瞬にして赤く染まる。

「べ、別に。たいしたことじゃねえよ。さあ、いいから寝ろよ。」

「いいじゃない、教えてよ新一。何を話してたのよ。」

「だから、ただの世間話みたいなもんだよ。おもしれえことは何もねえって。」

コナンは両手を振って必死にごまかそうとする。

「うそだよ。」

「あのなあ、何で俺が嘘なんてつかなきやいけないんだよ。」

「だって…。」

蘭はゆっくりと寝袋から這い出る。その様子が、コナンにはなぜか不気味に感じた。この感覚は、前にも何回か感じたことのあるものだった。

「あの時の新一、昔私に向けてた顔にそっくりだった。気持ち隠そうとして、眼を背けて話すあの仕草は、新一が大事な何かを伝えるときによくやってた。」

コナンの背中を、冷たい何かがつたう。眼に見えない不安に押しつぶされそうだった。

「もしかしてさあ、新一…。新一の好きな娘って、哀ちゃんなの？」
コナンの体が震える。心臓が大きく脈打っていた。

コナンは迷っていた。この事実を認めていいものだろうか。蘭は、

コナンの恋を応援してくれると言っていた。だったら、ここで真実を打ち明けても問題はない。むしろ打ち明けるべきだ。しかし、コナンは行動に移せない。

理由は、先ほどから感じる、眼に見えない不安と、体に纏わりつくような不気味な感覚。それらが、コナンの次の一言を妨げている。本当に、打ち明けていいのか？

漠然とした疑問が、コナンを縛りつけていた。

コナンが黙りこくると、蘭がじれったそうな声を出す。

「ねえ、どうなの？ 新一ってば！」

コナンは蘭の迫力に、ついに観念した。

「じ、実はそういうことなんだよ……。」

コナンの顔が言い終わると同時に真っ赤に染まる。

ちらりと蘭を見ると、蘭の体は小刻みに震えていた。

「……蘭？」

「……よ。」

「え？」

「何よ！ あんな暗い娘の、どこが良いのよ！」

突然、蘭が叫びだす。コナンは哑然とした表情で蘭を見ていた。

「ねえ、新一。嘘だよ？ 私にやきもち妬かせようとして、嘘ついてるんだよね？ ね？」

蘭がすぐるようにコナンの服をつかんだ。それは確認というより、懇願に近いものだった。

「い、いや、俺は本当に」

灰原が好きなんだ。

そう言おうとしたコナンの唇を、やわらかい何かが包んだ。蘭の顔が目のある。

キスをされている、と気づいたのは、その数瞬あとだった。

（何してるんだこいつ！）

コナンは急いで蘭を引き離そうとするが、首に回された手はがつちりとコナンをとらえて離さない。

「んー！んんー！」

コナンは必死の抵抗を試みるが、空手をやっている蘭にはまるで通用しない。

コナンの口の中に、ぬめぬめとした柔らかいものが侵入してくる。それはまるで独立した生き物のように、コナンの口内を縦横無尽に這いずり回る。

その何ともいえない快感が、コナンから徐々に思考を奪っていく。たつぷりと時間をかけて嘗め回した後、蘭はゆっくりと舌を抜いた。コナンと蘭の口を、銀色の糸がつないでいる。

「な…何して…」

何が起きたか解らないといった感じのコナンに、蘭が妖艶な笑みを浮かべる。

「もしかして、こんな激しいの初めてだった？だとしたら私、嬉しいな。新一も、嬉しいでしょ？」

にや、と笑う蘭に、コナンはまた得体の知れない不安を感じ取る。

「お、お前…。な、何したかわかってんのか！今は、智明さんを裏切る―」

そこまで言ってまた唇をふさがれる。

卑猥な水っぽい音が響く。

今度は先ほどのよりも激しく情熱的だった。

「ぷはっ。はあ、はあ。今、その人の名前出さないで。私のことだけ考えて。」

そう言って、またキスをしようとする。

そんな蘭を、コナンは必死に抑える。

「やめろよ！俺はお前とこんなことがしたいんじゃない！」

コナンの言葉に、蘭はクスリと笑う。

「とか言って…。新一のここ、準備できてるみたいだよ。」

蘭はコナンの下半身を指差して言った。

コナンは羞恥心からか、見る見る顔が赤くなっていく。それを見た蘭がまた嬉しそうに言った。

「ふふ…。嬉しい。ちゃんと私で反応してる。」

蘭はコナンの耳元に口を寄せる。

「新一…童貞でしょ？大丈夫だよ、私が手取り足取り教えてあげる。新一は、私に任せてればいいから。ね？」

蘭はまたキスをしながら、コナンのズボンに手を伸ばす。

悲

週があけて今日は月曜日の放課後。キャンプから一日が経った。

歩美、光彦、元太の三人は困惑していた。というのも、キャンプが終わってから、コナンの様子が眼に見えておかしいからだ。

常にどこか暗い表情で、話しかけてもそっけない態度をとる。授業中もうわの空だった。

学校が終わって、ほとんどの生徒が帰り支度をしている今も、コナンはぼーっと外を眺めている。

「何かあったんですかね、コナン君。」

光彦が心配そうに言う。

「キャンプの二日目も、朝早くに用事ができたって言って先に帰っちゃうし……。きっと、一日目に何か嫌な事があったんだよ。」

歩美も続けて話す。よほど心配なのか、両手で制服をぎゅっとつかんでいる。

「……もしかして、俺がアイツの肉取ったの、まだ根に持ってるのかな。」

元太の一言に、二人は大きなため息をつく。

「な、なんだよ。その反応。」

「元太君、まじめに考えてくださいよ。」

「そうだよ。こんな時にふざけないで。」

元太をしかるように、怒気のこもった声で二人は言った。そんな様子に、元太はなぜ自分が怒られているのか解らず、「悪かったよ」と素直に謝るしかできなかった。

「ねえ、哀ちゃんはどう思う？」

歩美が唐突に、黒板を掃除している灰原に話をふった。

灰原は興味なさそうにコナンの方をちらっと見た後、

「さあ？彼にだって、一人で悩みたくなるときだってあるんじゃない？今はほつといてあげましょう。」

と言つて、何事もなかったように掃除を再開した。

「相変わらず、クールですね灰原さんは…。」

光彦が感嘆の声をもらす。

「うん…。でも、確かに哀ちゃんの言う通りかも。今はそつとしておこつか。」

歩美の言葉に、元太と光彦もうなずいた。

「コナン君、先に部活に行つてますよ。」

「ん…。ああ、悪い光彦。俺今日部活休むわ。」

「え…。」

光彦は驚いてコナンの方を見る。コナンが部活を休むことは滅多になかったからだ。そして、どうやら驚いたのは光彦だけではないようだった。

「ど、どうしたのコナン君。どこか具合でも悪いの？」

「いや、そういうんじゃないけど…。なんか、調子悪くて。今俺が行つても、迷惑かけるだけだと思うしな。コーチにはちゃんと書くとくからよ。」

コナンはまた、影を落とした表情で言う。いつものコナンらしからぬ表情であつた。

「…そつか。わかつた。部員みんなには、私たちから伝えておくね。」

歩美は無理矢理笑顔を作つてそう言つと、それ以上コナンに何も言うことなく、教室を出て行つた。光彦、元太も、心配そうな顔をしたものの、歩美と同様何も言葉をかけずに部活へと向かつた。

「…オメーも行けよ、灰原。」

三人が出て行つても、一人だけ動こうとしない灰原に向かつてコナンは言つた。

灰原はそれを聞いてすぐに教室のドアへと歩き出したが、出て行く

直前に、

「…今日、七時に私の家に来て。」

と抑揚のない声で言っ、そのあとすぐに教室を後にした。

コナンは家で、昨日の出来事を思い出していた。

蘭がコナンのズボンに手をかけた時、コナンは思い切り蘭を突き飛ばし、急いでテントから出て行った。

その時に、蘭が何かを叫んでいたが、コナンは決して振り返らなかった。

そして早朝、皆が起きてすぐに、逃げるように自分だけ帰ったのだ。

つい先日、蘭に自分の気持ちは伝えていた。それに対し、蘭は『友達でいよう』と言ってくれた。確かにコナンは聞いた。だが確実に、蘭はまだ自分をあきらめてはいない。

自分の気持ちが本当は理解されていなかったことが、コナンには悲しかった。

そして、蘭が昔と変わってしまったこと、蘭を変えてしまったのは自分だということがコナンの心を締め付ける。昔の蘭であれば、相手の気持ちを無視したりはしない。自分の気持ちを他人に押し付けたりはしない。ましてや、無理矢理あんなことをするわけがない。そして、蘭がそうなってしまった原因を作ったのが、紛れもない自分であることが、コナンにとっては耐え難い事実だった。蘭の気持ちに自分がもっと早くに気づいてさえいれば、こんな悲しい思いをしなくてすんだかもしれない。そんな思いがコナンにはあった。

さらに、もう幼馴染の關係に戻ることはできないだろう、とコナンは思う。そうであれば、自分が蘭にしてやれることは、もう何も無いのではないだろうか。

だからといって、もうコナンは蘭を選ぶことなどできなかった。自分は今も、灰原が好きなのだ。抑えられないほどに。自分の気持ちは、ちよつとやさつとで揺れるほど軽いものではない。

やつと和解できたと思ったからこそ、今回の出来事は悲しい。こんなことがあつてもなお、蘭と昔のように仲良くやっていきたいと考える自分は愚かなのだろう。二人の気持ちは完全に空回りしているというのに。

そう思つても、コナンには蘭をつき離せる自信がなかった。

コナンが頭を抱えていると、ふいに携帯が震える。

携帯を開くと、灰原からの着信であつた。

コナンはハツと気づいて家の時計を見ると、時刻はすでに八時を回つていた。慌てて電話にでる。

「も、もしもし。」

『もしもし、じゃないわよ。あなた、今日放課後に私が言ったこと忘れたわけじゃないでしょうね?』

灰原の怒りに満ちた表情が、電話越しに伝わってくる。どうやら本気で怒っているようだ。

「わ、わりーわりー…。今そっち行くからよ。」

そう言つて、灰原が何か言う前に、コナンは電話を切る。そして家着のまま走つて外に出て行つた。

それから一時間ほどして、蘭が江戸川（旧工藤）宅を訪れるのだつ

た。

「ちーす。灰原ー。来たぞー。」

阿笠邸に着くと、リビングには誰もいなかった。コナンが呼びかけると、奥から阿笠博士と灰原がコーヒークップ片手に出てきた。

「人のこと遅いつて呼び出しといてそれかよ。」

「あら。工藤君が遅いからでしょう？」

コナンと灰原が皮肉の言い合いをしていると、阿笠が、

「まあまあ。新一、哀君はさっきワシの研究の手伝いをしてくれていたんじゃないよ。」

と、コナンをなだめるように言った。

「え？灰原が？オメー、博士の発明には興味ないんじゃないのかったのかよ。」

「別に。ただ、今回ののは私にも関係があることだから。」

「あ？なんだよそれ。」

「そんなことはどうだっていいわ。」

コナンの疑問を無視して灰原は話を始める。

「あなた、蘭さんと何かあったわね。」

その言葉に、コナンは苦しそうな表情をして、灰原から視線をそらす。そんな反応を見て、灰原は「はあっ」とため息をついた。

「まあ、大体予想はつくけど…。キャンプのときに何があったか、詳しく教えなさい。」

灰原の上から目線の言い草に、コナンは頭にきたのか、

「はあ？何でオメーに…。」

と、嫌味を込めて言い返す。

そんなコナンを見て、灰原は怒りを隠そうともせずに言った。

「いいから。言いなさい。今日のあなたを見て、あの子たちも心配してるのよ。」

灰原はコナンの眼をじつと見つめる。単純な好奇心からではないことが、その瞳からは十分に読み取れた。

コナンはその視線について耐えられなくなり、「わかったよ。話すよ。」と自分から妥協したのだった。

「なるほどね。そんなことがあったの。」

コナンは包み隠さずに全てを打ち明けた。最後のほうはかなり言いにくい内容だったが、何とか上手く言葉を選び、真実を告げた。冷静に見える灰原とは裏腹に、阿笠はまるで信じられない、といった顔をしていた。

「ま、まさか蘭君が…。しかも、君の正体に気づいておったとは…。」

「

「まあ、よく考えたら、ばれても仕方ねえようなこと、たくさんやってきたからな。それより博士、悪かったな。今まで黙ってた。」

「いや、いいんじゃないよ。それより、どうするつもりなんじゃ。」

心配そうに阿笠はコナンに話しかける。

「ああ…。だから、それを今日ずっと悩んでいたんだよ。せっかく前の関係に戻れたのに、また仲たがいになるのはな…。かといって俺は蘭の気持ちに応えてあげることができねえし…。」

苦々しい表情をするコナンに対し、灰原はまたため息をついた。

「んだよ、何か文句でもあんのか。」

「別に…。ただ、まるで子供の恋愛のようで、あきれちゃって…。」

「ああ？」

灰原のまるで自分を馬鹿にしたような言い方に、コナンは声を荒げる。灰原を思い切り睨み付けて言った。

「どつという意味だよ。」

「まんまの意味よ。あなた、悩んでいる今の自分が、かつこいいとも思っているんじゃないの？」

「んだとデメエ！」

「これ、新一！」

阿笠の静止も振り切り、コナンは灰原の襟につかみかかる。灰原は抵抗せず、ただコナンをじっと見つめている。

「オメーに、俺の気持ちかわかんのかよ！」

「あなたの気持ちなんてどうだっていいわ。」

灰原がピシヤリと言い切る。

「あなた、振られた女が、そう簡単に割り切れると思ってるの？　そう簡単に、友達としての関係に戻れると、本当に思ってるの？」

灰原が強い口調で言った。その言葉に、コナンはのどを詰まらせ、動揺を隠しきれない様子だった。つかんでいた手をゆくりと離す。

「私、言ったわよね。『そう簡単に彼女があきらめるはずがない』って。実際、こんな結果になったじゃない。」

灰原はさらに責め立てるように続ける。

「いい？　あなたがしたことは、単に、彼女に叶いもしない希望を与えただけ。あなたはさぞいい気分だったかもしれないけど、あの子はただあなたの思わせぶりの態度に振り回されただけよ。そんなことしたって、まったくお互いのためにならないわ。いずれ、どちらも傷ついて終わる。今の状況みたいだね。」

あなた、彼女をこれ以上傷つけないみたいなのを言っていたけど……。あなたがまた曖昧な態度をとっていけば、それこそ彼女を苦しめる結果になることがわからないの？　人と人との間では、時には離別も必要なの。傷つけるのが怖いなんて、情けないこと言わないで。」

コナンは言葉を返すことができなかった。まったくその通りだと思っただけ。よかれと思ってやっていたことだったが、結局はいたずらに蘭の心をもてあそんだだけだったのかもしれない。

コナンは、誰もいなければ、泣き出した気分だった。

「じゃあ…。じゃあ、いったいどうすりゃ良いんだよ。このまま、アイツと分かり合えないまま、終わっちゃうのかよ…。」

コナンの消え入りそうな声。そんなコナンの肩に、阿笠がそっと手を乗せた。

「今は無理かもしれんが、蘭君が君の事をすっぱり忘れてくれるまで、気長に待てばよかるう。何事も、時間が解決してくれるというしのお。」

阿笠が優しい口調で言った。それに続いて、灰原も口を開く。

「まあ、博士の言っていることも、ひとつの手ね。…それに、せっかくあなたは頭がキレルんだから、もっとよく考えなさいよ。あなたは人の気持ち解る人なんだから、きっと良い解決策も見つかるわ。私たちも、手伝えることがあれば手伝うから。」

灰原も、先ほどとは打って変わって、優しい口調で言う。その表情はとても暖かかった。

そして、二人の言葉に、さっきまでまるで死人のような表情をしていたコナンにも、やっと明るさが見え初めて来ていた。

「…ああ、そうだな。二人とも、ありがとう。」

「けど、博士の言うようにするとしても、まずは蘭さんにもう一度はつきりとあなたの気持ちを伝えるべきね。それでも、まだ泣きついてくるようなら、拒絶も必要よ。あなたにそれができる？」

コナンは少し戸惑っていたが、やがてまっすぐ灰原の眼を見つめて言った。

「…わかってる。覚悟はしてるさ。」

決意に満ちた表情だった。それを見た灰原は、

「…そう。」

と、一言だけ言った。だが、いつものポーカーフェイスに、どこか安心したような微妙な笑みが浮かんでいるように、コナンには見えなかった。

『ピンポン』

その時、玄関のチャイムが鳴った。

阿笠は顔をかしげる。

「誰じゃ？こんな時間に。」

不思議に思いながらも、阿笠はぱたと玄関へ向かい歩いていく。玄関を開けると、そこには――

「あ、博士。こんな夜遅くにごめんね。新一の家に行ったんだけど、誰もいなくて…。新一、いる？」

「…蘭？」

不安そうな眼をした、蘭が立っていた。

悲（後書き）

昨日、『瞳の中の暗殺者』と『天国へのカウントダウン』を見た。
正直、コナンの映画って面白くないことのほうが多いんですけど、
この二つは好きですね！。

派手なラストと、あと少年探偵団が活躍するのが良いです。あと灰
原が目立つところも。

やっぱり、デジタルよりこのころの画の方が自分は好きだな！。

忘れよう(前書き)

今から、まだ見たことがなかった銀翼の魔術師と漆黒のチエイサー
見ます。

実は、あまり期待していないんですが…(汗

忘れよう

コナンの目の前に現れた蘭は、走ってきたせいもあるのだろうか、額にうつすらと汗が浮かんでいる。そしてその表情は、何かに怯えるようにきゅっと強張っていた。

「…蘭？」

「…新一。さっき新一の家に行ったんだけど、いなかったから…。ごめんね、迷惑だった？」

心配そうに話す蘭は、以前のような明るさと、少しだけあった強引さをまったく感じさせなかった。

しかられた子供のように、縮こまっている。

「…いや、良いんだよ。で、どうした？」

コナンも、先日のこともあり、あまり蘭と目を合わせない。視線は常に蘭の足元を見ていた。

キャンプの時の蘭の顔が頭に張り付いており、うまくしゃべることができない。

コナンは心のどこかで、蘭のあの狂気をまだ恐れていた。

できれば、もう少し、蘭とは距離を取っていたかったというのが、コナンの本音であった。

「うん…。あの、博士とあ、哀、ちゃん。ごめんなさい、少しだけ二人にさせてくれない？突然お邪魔しておいて、勝手だよね。でも、お願い。」

灰原は、なぜ自分の名前でもったのかを不思議に思っていたが、今はそんなことはどうでも良かった。

阿笠は、おろおろとコナンと灰原を交互に見ている。

「…ええ。わかったわ。ゆっくりしていつて。…さあ、博士、行くわよ。」

「え？でも、哀君」

「いいから。」

灰原たちはそそくさと出て行つた。

「いいのか、哀君。その、蘭君は——」

「大丈夫よ。もし何かあつても、彼には麻醉銃があるし。」

それに、これはコナンにとって乗り越えなければならない、試練のようなものだ。灰原は考えている。

心の中で、コナンの成功を祈っていた。

二人がいなくなり、部屋を静寂が包んでいる。

どちらからも、話しかけようとしなない。

たつぷり二分ほど経つたとき、蘭が重い口を開いた。

「…怒つてる、わよね。キャンプでのこと。」

「…まあな。ただ、それよりも、あまりのことに頭がついていかなかったていうか…。」

どちらも、冷静に言葉を選んで話しているようだった。

「なんであんなことしたんだよ。お前らしくねえじゃねえか。」

「私も、よくわからないんだ…。新一が、哀ちゃんの名前が出た途端に、顔真っ赤にしたのを見たら、押さえがきなくなっちゃつて。」

蘭が、ひざの上においていた手を、ぎゅっと硬く握つた。その手の上に、水滴が二、三度落ちた。

蘭は、かつてコナンがキレイだと思った、あの太粒の涙を流していた。

「新一に…。せっかくまた、本当の、新一に会えたのに、誰かほかの人の元に行っちゃうって考えたら、怖くなつたの。何も手につか

なくなった。おかしいよね、わたし。自分から新一の恋を応援するって言ったくせに。」

コナンは黙って蘭の瞳を見つめている。

蘭が一度、眼にたまった涙をぬぐった。そして続ける。

「好きなの。新一が、好きなの！もう、どうしようもないくらいに好きなの！愛してる。新一が大好き！ふふ、…こんなおかしいことってないわ。昔は言うのあんなに苦労してたのに、今ではこんなに簡単に言えちゃうなんて。」

蘭はふふふ、と自虐的に笑った。

「だからたぶん…。あの時は、無意識のうちだった、と思うの。手っ取り早く私を意識させるためには、色仕掛けしかないって、瞬時に体が動いちゃったんだ。そして、哀ちゃんを、こんなに思われている哀ちゃんを、一時でも新一の心から消したかったから、つい強引に…。結局私、新一に迷惑かけてばかりね。」

「いや…。」

コナンは何か言葉を探したが、見つからなかった。

蘭の気持ちは痛いほどわかる。自分も、灰原を思う気持ちは、誰よりも強い。不安になることだって多々ある。

蘭は、本気の恋をしているのだ。

そう、かつての自分も、本堂瑛介から彼の蘭への想いを聞いたときに、蘭の意思も確認せず、いきなり『だめだ』と言い放った。それは、蘭に本気の恋をしていたからだ。瑛介の意思も、さらには、蘭の意思も、関係なかった。蘭を離したくなかった。

そんな本気の恋を、誰が止められるというのだ。

今の蘭は、あのときの自分と同じなのではないだろうか。形や大きさは違えど、好きな人を離したくないという、あの強い気持ちは、簡単に抑えられるものではない。それを、コナンは知っている。

だから、蘭にかけてやる言葉も、上手く出てこなかった。

「…でも、お願い。嫌いにならないで。」

不意に、蘭が消えてしまいそうな、はかない声を出した。

「蘭…。」

「嫌いにならないで。お願い。もう、どこにも行かないで。十年前のように…。離れないで。恋人になってと欲しいとまでは、言わないから。せめて、私の見えるところに、私のそばにいて。もう、あんな想いは嫌。おね、がい。お願い、します。」

蘭は嗚咽をまじえながら、支離滅裂に言った。

コナンの眼にも、いつの間にか涙が浮かんでいる。

どうして自分は、こんなにも想ってくれている人を好きになれないのだろう。いや、そんなことはもう解っている。灰原が好きだからだ。一生守ると心に決めたからだ。

ならば、目の前で大粒の涙を流して懇願している蘭の気持ちはどうなってしまうのだ。

好きな人が、ほかの誰かに奪われてしまう気持ちは、自分が一番良くわかつている。

蘭は今、まさにあの頃の自分なのだ。

救いたい。

コナンは素直にそう思う。

蘭を、救いたい。

あの頃の自分は、友達や、家族に支えられ、忘れることができた。

長い時間がかかったが、それでも、キレイな思い出として、考えられるようになった。

自分にできるのだから、蘭にできないはずがない。蘭は、自分なんかよりよっぽど強い人間なのだから。

コナンは決意を固める。蘭を救ってみせる。

蘭にとってはつらいだろうが、いずれ、良い思い出として、良い友達として、思えるようになるはずなのだから。

「バー口。おれがオメーを嫌いになるわけがねえだろ。」
「新……。」

「でも、俺たちはやつぱり、少し距離を置くべきだ。それこそ、普通の生徒と教師の関係。それ以上でも、それ以下でもない。」

「そ、そんな」

「最後まで聞けつて。」

コナンは、自分がどのようにして蘭を忘れることができたか、順を追って詳しく説明する。

蘭は、新出と結婚してしまったという後悔からか、先ほどよりも暗い顔になっていた。それでも、コナンは話すのをやめない。

そして次に、さっきまで話していた灰原たちの考えを話す。

時には、相手を突き放したり、遠ざけたりすることも必要だということ。中途半端な関係では、お互いが傷ついてしまうことなど。もちろん、灰原の名前を言うのは避けた。

コナンの話が終わっても、蘭の表情はさえない。

当然といえば当然のことだ。コナンもすぐに変わるとは思っていなかった。

コナンは最後の手段に出る。

「……それでな、蘭。今回のこともあって、いろいろ考えたんだけど……。俺、近いうちに、灰原に告白しようと思ってんだ。」

「え!？」

蘭が大きく反応する。

「俺がふらふらしてつから、蘭をいたずらに傷つけたんだ。男として、責任はちゃんととんねえとな。」

「…もう、決めたことなの？」

「ああ。」

コナンの表情は、事件の犯人がわかったときのような、精悍な顔つきをしていた。

迷いは、一切ない。

蘭が大好きだった、工藤新一の顔だった。

「…そっか。」

蘭は、コナンの表情を見てあきらめたように、また寂しそうに笑った。

「…もう、私の入る隙間は、ないみたいだね。…わかった。今度こそ、新一を応援するね。」

「蘭…!」

「そのかわり、いい?こんな良い女をフツたんだから、幸せになんのよ。」

「ああ、わかってるよ、蘭。」

「私も、時間がかかると思うけど、あんたのこと、忘れてみせる。そしたら…。また、幼馴染として、楽しくやっていこ。」

「…ああ!」

そう言って二人は握手をした。

どちらももう、泣き止んでいた。

「本当に、送ってなくていいのか？博士のビートルで送ってけるのに。」

「ううん。こんな遅くにお邪魔しておいて、足の世話までさせられないよ。…それに今日は、夜風に当たりながら帰りたいから。」

「…そっか。」

「うん。じゃあね新一。」

「ああ。」

コナンは蘭の姿が見えなくなるまで、外の闇の中に立っていた。

（がんばろうな、蘭。）

そんな二人を、灰原が遠くから見つめていた。

（何事もなければいいけど。簡単に上手くいくとは、ちょっと思えないわね。）

「終わっちゃったなあ。」

阿笠邸から離れたところで、私はぽつんとつぶやいた。

今までの苦労は、なんだったんだろうか。毎日家に通ったりして、馬鹿みたい。新一が望んだわけじゃないのに。

もしかしたら。

もしかしたら、新一は私を選んでくれるかもしれない。そう思っていた自分が情けなかった。

十年前、私が智明さんと付き合った時点で、全ての決着はついていたのだ。

忘れよう。

新一への想いを。

そう考えたら、また涙が出てきた。

胸がきゅんと締め付けられる。

新一。やっぱり、簡単じゃないね。好きな人を忘れるって、難しいよ。

でも、結局忘れられた新一は、やっぱりすごいね。

でもね、新一。私、変わってみせるよ。新一のために。

新一が幸せなら、私はそれでいいから。

そしていつか、本当の笑顔で新一と話せるように。

辛い日々かもしれないけど、それでも私、がんばるよ。

だから忘れよう。

新一への想い、忘れよう。

忘れよう――

蘭は独り、心の中で同じ言葉を、何度も何度も繰り返しながら、漆黒の闇の中を歩く。

そして、闇に飲み込まれるように、消えた。

蘭は忘れていた。自分が仕掛けた『盗聴器』のことを。
そしてそれが、後の二人の運命を大きく変えてしまうことを、
蘭は知らない。

歯車はいまだ、回転をやめない。

忘れよう(後書き)

次回あたりから、らぶらぶ展開が始まる予定です。
そしてそろそろ、黒の組織が絡んできたり…

もうちょっとだけ、がんばりますね。

恋人

「見つけたぜ……！決定的な証拠を！」

コナンはにやりと笑う。

傍にいた容疑者たちは、コナンのそんな様子にも気づかず、先ほどから言い争いを続けている。

「だから、俺にはちゃんとしたアリバイがあるって言ってんだろ！犯人はアリバイのねえあの女だって！」

「ちよつと待つてよ！私には殺す動機がないって、さっきから何回も言ってるじゃない！一番死んだ彼を恨んでいるのは、あのおじいさんなんだから、あのおじいさんが犯人に——」

「ま、待て！わしは違う！わしにはあんな惨いことは——」

「落ち着いてください。」

三人が言い合う中、コナンが会話を遮るように言った。その声は落ち着いていて、さらに自信に満ち溢れた力強さがあつた。

「この事件の真相なら、もう解りました。」

そのコナンの言葉に、三人が身を強張らせた。部屋に緊張が走る。

コナンはうつすらと口元に笑みを浮かべ、三人のもとへゆっくりと歩いていった。

「さあ、この殺人劇もそろそろ幕引きだ。これからは僕の推理ショーを楽しんでもらいましょう。」

そして、コナンは一人の人物を指差し、部屋に響き渡る大きな声で言った。

「犯人は——あなただ！」

「相変わらずみたいね、工藤君。」

「あん？」

朝。

傍でサッカーボールを蹴って暇をつぶしていたコナンに対し、灰原がつぶやくように言った。

「何がだよ。」

「これよ。」

灰原は新聞記事を見せる。

記事には、昨日コナンが真相を暴いた殺人事件について書かれている。

「ああ…。警察から呼ばれてな。ま、わけねえよ。」

「違うわよ。この齒の浮くようなキザな台詞のこと。」

「え？」

コナンがその記事をよく見てみると、推理に入る前にコナンがしゃべった台詞が、そのまま記事にされていた。

「あ…。」

「まったく…。よく恥ずかしげもなくこんな言葉をすらすら言えるわね。あなたって、本当はナルシストなんじゃない？」

コナンを見る灰原の眼は、まるで気持ち悪い物でも見るかのようにであった。

「うつせーな…。俺のスタイルに口出しすんなよ。こういうしゃべり方のほうが、自信満々って感じで、犯人にもプレッシャーになん

だよ。それに、こういう話し方だと女の子のファンも増えるしな！」
へへ、とコナンは無邪気に笑う。

灰原はそれを、「はいはい」と子供をあやす母親のように、さらっと受け流してしまうのだった。

「で？どうなの、彼女。」

ごく自然に灰原がたずねた。

灰原は「彼女」としか言っていないが、それがつまり蘭をさすことをコナンは解っていた。

「ああ。最近は、全然話してねえよ。最低限しか。あいつも、特に変わった様子も見せないし…。今のところ、順調かな。」

「そう…。」

灰原は何か言いたそうにしているようにコナンには思えたが、彼女はそれ以上何も言わなかった。

「なんだ？何か気になることでもあんのか？」

「いいえ…。なんでもないわ。」

そっか、とコナンは言って、それから自分の学生かばんをこそそこそとあさり始めた。

灰原が不思議そうにその様子を見つめていると、コナンが二枚の紙切れを取り出した。

「これは…？」

「『帝丹マリランド』のチケットだよ。オメー、動物好きだから水族館も良いかかって思ってたさ。」

「ふーん。…って、え？どういうこと？」

何を言っているか解らない、という表情の灰原に、コナンはしれっと言った。

「いや、だから、オメーを水族館に誘ってんだよ。もちろん、俺とオメーだけで。」

「…は？」

コナンは先ほどから家の中を、右へ左へ歩き回っていた。明日は水族館へ行く。だが、いつもと違うのは、コナンと灰原の二人だけということ。

落ち着かなかった。学校では冷静に振舞っていたが、実際はコナンはがらにもなく緊張していたのだ。

今まで、灰原と二人だけで出かけるということは、ほとんどなかった。

蘭とは昔からよく二人で遊びに行っていたので、高校生になっても気まづくなったり、恥ずかしく思うこともなかったが、灰原は違う。そもそも、灰原は人ごみは嫌いなほうであつたし、水族館のようなアミューズメント施設にも、進んで生きたいとは思わない性格である。

だからこそ、コナンは上手いくかどうか不安だった。

果たして、楽しんでもらえるのだろうか。いや、楽しんでもらわなければ。

自分は明日、告白するのだから。

そう、コナンは明日良い雰囲気になれば、告白するつもりだった。

昔の自分は、自分になかなか素直になれなかった。だが、今は違う。蘭のときのように、想いを告げずに後悔するのであれば、当たって砕けたほうがまだましというものだ。

コナンはいつの間にか立ち止まり、握りこぶしを作っていた。

その時、電話が鳴った。

もう零時を回る頃だ。不思議に思い、携帯を開くと、『灰原』の文字が。

コナンに嫌な予感が走った。

ゆっくりと通話ボタンを押す。

「も、もしもし？灰原か？」

『ごめんなさい、こんな遅くに。…工藤君、悪いけど明日、行けなくなつたわ。今日中に連絡しておかないといけないと思って。』

コナンはがっくりとうなだれた。予感は的中していた。

「そうか…。まあ、仕方ねえな。こっちも、急で悪かったよ。もう遅いし、また明日な。」

そう言つて、コナンは電話を切ろうとするが、電話の向こうで『待つて』という灰原の声が聞こえた。

「どうした？」

『…………』

「灰原？」

『…今から、私の家に来れないかしら。』

「え？」

『…待つてるから。』

「ちょ、おい——」

コナンが理由を聞く前に、灰原は電話を切った。

コナンは何が何だかわからないまま、とりあえず寝巻きを着替え、灰原の家に向かった。

「どうしたんだよ急に。」

コナンが到着すると、阿笠はもう寝てしまっていて、灰原がぼつんとリビングのソファ―に座っていた。

コナンの声を聞き、うつむいていた灰原はゆっくりと顔を上げる。だが、視線は相変わらず下を向いている。

「何かあったか？」

コナンの問いかけに、暗い表情の灰原は何も答えない。

「…灰原？」

灰原はやがて、その重い口を開いた。

「…工藤君。聞きたいことがあるのだけれど。いいかしら。」

「お、おう。」

急に話し始めた灰原に内心驚きながらも、冷静を装い、コナンは灰原の次の言葉を待った。

「こんなこと言うと、自分に自信があるあなたみたいな言い方で嫌なんだけど…。もしかして、あなたの好きな人って、その、私なの

？」

「なっ！？」

コナンの顔が一瞬にして真っ赤に染まった。

「ち、ちがつ！あ、いや、えっと、その、別についていうか…。」

コナンは両手を勢い良く左右に振り、支離滅裂な言葉を話す。

誰がどう見ても、凶星だった。

だが、そんな様子のコナンを見ても、灰原はいっこうに表情を変えない。むしろ、どんどん影が差しているように見えた。

その顔を見て、胸騒ぎがした。

灰原は俺の気持ちを知っている？知っていてあの表情…。

考えられる答えなんて、ひとつしかないじゃないか。

フられたんだ。

コナンはそう思った。

今まではしゃいでいた自分が、急に酷く滑稽に思えた。

体の力が抜けた。座り込みそうになるのを必死に堪えた。

だが、空っぽの心とは逆に、頭は何故か冷静で、これからのことを考えていた。

もうこれからは、友達としてもやっていけないのだろうか。蘭のケースのように。

それだけは嫌だった。これだけ悲しいのに、これからさらに辛くなるなんて、考えたくもなかった。

コナンは体にむちを打ち、暗い顔の灰原に話しかけた。

「確かに、俺はオメーが…。灰原が、す、好きだったよ。でも、もういいんだ。オメーは、ガキの恋愛なんか、興味なかったよな。今日のことは忘れてくれ。…でも、これからも友達でいてくれよ。オメーは、そう簡単に割り切れるわけないって言ってたけど、割り切ってみせるからよ。」

こんなことを言えば、灰原は怒るだろうか。蘭には偉そうに言うておいて、自分は何んて情けないんだろう。ふられる覚悟もないのに、告白したのが間違いだったのだ。

だが、コナンの考えとは裏腹に、予想外の言葉が返ってきた。

「なんで…。」

「え？」

「なんで私なのよ…！」

「灰原…？」

「なんで私なんかをつ！」

灰原が立ち上がり、大きな声で叫んだ。

コナンは予想外の言葉に頭が回らず、ただ灰原を見ていることしか出来ない。

「なんで私なんかを好きになるのよ。いい？あなたは私のせいで小さくなったの。私のせいで、組織に関わってしまった。私のせいで

蘭さんと心が離れてしまった…！あなたの不幸は、全部私のせい。私なんか、あなたに好きになってもらえる資格はないわ！」

灰原は両手で顔を押さえ、また深くソファ―に座り込んだ。

「私だって…。私だって、あなたのこと…！あなたより、ずっと前から…。でも、心の奥深くに封じ込めた。私が、あなたにこんな感情抱くなんて、身の程知らずにも程があるもの。」

今度は膝を抱え、顔を隠す。そして、辛そうに続けた。

「あなたを今日ここに呼んだのも、告白されるのが怖かったから。あなたから告白されたら、断れる自信なかったから…。だから先に断ろうと思ったの。」

コナンは何も言わず、黙って灰原を見つめている。

「あなたの気持ちは素直に嬉しい。本当に嬉しいわ。だけど、その気持ちは、きつと何かの間違いよ。それが気の迷い。だって、不幸の原因を好きになるわけがないもの。だから――」

「俺の気持ちが間違ってるって？」

灰原の言葉を遮り、コナンが震えた声で言った。それは、悲しみというより、怒りによる震えだった。

コナンはそのまま灰原に近寄り、肩を両手でつかんだ。

灰原は驚いて、びくりと体を震わせた。

「いいか！俺の気持ちは間違ってるなんかねえ！」

コナンは叫ぶように言った。

「間違ってたら、お前と会っただけで、あんなに緊張するわけねえ！お前の顔を、恥ずかしくて見れなくなったりするわけねえだろ！」

「でも…！私は、あなたから日常も、恋人も、幸せも奪った女よ！

私が例の薬さえ作らなければ、あなたは平穏に暮らせていたのに。私が全部奪ったようなものじゃない！」

灰原も負けじと言い返す。それに対し、コナンはため息をひとつと、今度は落ち着いた表情で言った。

「何で俺が幸せじゃないって決めつけんだよ。そりゃあ、確かにいろいろ辛いこともあった。でも、今は工藤新一だったところと同じくらい、いやそれ以上に、毎日楽しくてしかたないんだよ。」

コナンは灰原の肩においていた手をゆっくりと下ろす。

「光彦や、元太、歩美、そして今の友達がいる。服部みたいなライバルにもめぐり合えた。FBIにも知り合いが出来た。警察関係者とも仲良くなった。たぶん、子供じゃなかったら、こんなつながりも出来なかったと思う。…それに、オメーの薬がなきゃ、俺は組織の存在にすら気づかなかった。オメーのおかげで、世界を脅かす謎の組織を縄にかけることが出来るかも知れないんだぜ？」

そこまで言って、いったん話を切った。コナンはうつむきがちの灰原の顔を手で持ち上げ、自分の方を向かせる。心なしか、灰原の顔が赤く染まったような気がした。

そんな灰原を見て、コナンは優しく微笑んだ。

「それに、オメーが作った薬のおかげで、俺は灰原に会えたんだ。」

コナンの言葉を聴いて、灰原は眼に涙をためた。それを隠すように、コナンの腰に腕をまわし、胸に顔をうずめる。

「オメーは家族を人質にとられていたから、組織の言いなりになるしかなかった。だから、薬のことだって、灰原のせいじゃない。自分を責めたって仕方ねえだろ。…それに、俺を薬で小さくしやがっ

たのはジンだからな。オメーのことはこれっぽっちも恨んじやいねえよ。灰原も、もう自分のこと許してやれよ。」
そう言いながら、灰原の頭を優しくなでる。灰原の柔らかい髪は、心地よくコナンの指に絡みついた。

「でも…。でも、蘭さんのこと…。」

「蘭のことは、確かに辛かったけどな。でも、もういいんだ。…悲しいけど、人の気持ちなんて、どうなるかわかったモンじゃないし。それに、この前やっと和解したしな。…それに俺、お前を想う気持ちなら、昔の蘭への想いに負けないほど強いって自信もって言えるぜ。」

へへ、とコナンは誇らしげに笑う。コナンからは灰原の表情は見えないが、灰原も笑っていることは胸の感触で解った。

「…バカね。何恥ずかしいこと言ってるのよ。やっぱりナルシストなんじゃないの？」

「うっせー。これが俺のスタイルなんだよ。」

二人はどちらともなく、抱き合ったまま、また笑い始めた。

「…本当に、私なんかでいいの？」

「オメーがいいんだよ。」

「ふーん。今日はやけに素直ね。昔とは大違い。」

「もう昔みたいなヘマはしねーよ。覚悟しろよ、どんどんストレートにいくからな！」

「あら、それは怖いわね。」

「…灰原。」

「…何？」

「昔も言っただけど、俺がオメーを守ってやる。一生、守ってやつから。んでもって、まだ罪の意識に苦しむようなら、俺もお前の苦しみを背負って生きてやる。だから…。だから、ずっと傍にいてくれ。」

「…ええ。努力するわ。」

「…ったく。こんなときでもかわいくねーな…。」

「ふふ…。私はそういう女よ。探偵さん。」

「はいはい…。」

二人の様子を、影からこっそりと阿笠が見ていた。

その顔は、まるで孫の成長を喜ぶ祖父のように、嬉しそうに笑っている。

そして、ゆっくり寝室へ戻っていった。

こうして、二人はめでたく恋人になったのだった。

平穩（前書き）

サンデーで行われた人気投票の結果です

○ベストキャラクター賞

1位	江戸川コナン	1028票
2位	工藤新一	646票
3位	怪盗キッド	489票
4位	灰原哀	281票
5位	服部平次	222票
6位	毛利蘭	116票

人気投票では灰原が蘭よりも上の順位なんですけど、「恋人にした
いキャラ」ランキングでは、蘭が2位で、灰原が6位でした。
ちなみに、1位は当然、新一です。

それにしても、投票した人少ないですね……。

平穩

コナンは疑問に思っていることがあった。

それは、昨日から今日にかけ、歩美、光彦、元太の三人が、コナンに隠れて（ほぼばれていたが）秘密の会話をしていることだ。

二時間目が終わり、休み時間に入った今も、光彦にわからない問題を教えてもらっているふりをして、光彦の机で三人が何やら話している。

もしかしたら、自分と灰原が恋仲になったことがばれたのか、とコナンはまず思った。もう、あの阿笠邸の夜から二週間近く経っている。そろそろばれてもおかしくはない。

だが、灰原は自分達の関係はなるべく隠しておきたいと言っていたために、学校では極力普段と変わらない接し方で生活している。おそらく、今のところは周囲にばれてはいないはずだ。よって、灰原との事は原因ではないとコナンは考え直したのだが――

（それが理由じゃないなら、あの三人がこそこそする理由って何だよ？）

コナンは必死に推理したが、明確な答えはまだ見つかっていない。かと言って、問い質す気にもならなかった。

（まったく……。俺と灰原にはうるさく言つくせに、自分たちはこれかよ……。）

心の中でそう呟くと、考えてもしようがないと思ったコナンは、次の授業の準備を始めた。

「おい、オメーら。次、移動教室だぞ。そろそろ行こうぜ。」

なかなか動かない三人にしびれをきらしたコナンがそう言った。

「ごめん、コナン君。悪いけど、先に行っててくれない？ 私たちも、すぐに行くから。」

歩みが困った表情で返す。

「はあ」と一度息を吐くと、コナンは机に座って頼杖をつき、ぼつとどこかを眺めている灰原に向き直った。

「……だよ。先に行こうぜ灰原。」

灰原はただ頷き、コナンに続き教室を出た。

「まったく、あいつら一体どうしたってんだ。」

廊下を歩きながら、コナンがつまらなそうに呟く。

「そう言えば最近、あの子たち隠れて何か話してるわね。」

灰原が髪を手で整えながら、いつもの興味なさそうな声で言った。

「オメー、なんか知らねーか？」

「さあね。…もしかして、私達のこと…。」

「俺もそれは考えたけどよ…。俺達、あいつらの前では別に普通だったし…。だから多分、それは無いと思うんだけどなあ。」

「うーん」と、右手の親指と人差し指の間で顎を挟むようにして、コナンがいつもの考えるポーズをとる。

その姿を見て、灰原がクスツと微笑んだ。

「頼りにしてるわよ。探偵さん？」

「わっ。」

灰原は言いながらそつとコナン左手を取る。

いきなり手を握られたことと、いつも学校では見せない笑顔に、コナンの顔が真っ赤に染まる。

「…学校では抑えるんじゃないのかよ？」

「大丈夫よ。誰もいないし。…もしかして、嫌なのかしら？」

灰原がからかうようにコナンを見る。

「…嫌じゃねーよ。」

コナンはそう言っつて、真っ赤な顔のまま手を握り返した。

「…そう。」

灰原もほんのりと顔を染めた。

丁度自分の頭の位置にあるコナンの肩に頭を乗せ、つないでいた手

の指を絡めた。

「…嬉しい。」

「え？何か言ったか？」

「ううん。何でもないわ。」

「ふーん。…お前、意外と女の子なんだな。」

「…それ、どういう意味かしら、工藤君？」

「イテテ！わかったから、そんなに強く握んなくて！」

教室のドアがぴしゃりと音を立てて閉まりました。それを確認して、僕たちはまた議論を再会します。

「やっぱり、光彦君の見間違いだよ。だって、二人ともいつも通りじゃない。…もう、こんなことやめようよ。なんか、コナン君と哀ちゃんを仲間はずれにしてるみたいだよ…。」

「そうだぜ光彦。正直、もうこんな話、飽きちまったよ。いいじゃねえか、二人が付き合ってたってよ。」

「…それはよくない！」

元太君の言葉に、僕と歩美ちゃんが同時に反応しました。まったく、元太君はなんてことを言うんでしょうか。

「じゃあ聞きますけど、なんで歩美ちゃんはそんなに平気そうなんですか？もし僕が見たことが真実だったとしたら、コナン君が——」
「だって私、コナン君のこと信じてるから！コナン君は浮気なんか

しないよっ。」

僕の言葉を遮って、歩美ちゃんが言います。迷いの一切ない、りりしい顔でした。

僕はため息をつきました。

歩美ちゃんは、コナン君と両思いであるとか信じきっているみたいです。僕から見ると、コナン君は歩美ちゃんのこと、ただの友達というか、妹というか……。そんな眼でしか見ていない気がするんですが……。

でも、すごく幸せそうに話す歩美ちゃんを見ると、そんなことも言えません。はあ。

「そ、そうですか……。でも、僕は本当に見たんです！あの二人が、一緒に、楽しそうに話しながら歩いているのを！」

「だーからー、あいつら隣同士なんだから、二人で買い物行くくらい、普通なんじゃねえのか？気にしすぎなんだよ、光彦は！」

そう言って、元太君は僕の背中を叩きます。ちよ、本当に痛いんですけど……。

確かに、元太君の言い分もわかります。でも……

「でも、あのときの二人は、何ていうか……。こう、いつもとオーラが違うっていうか、二人の雰囲気、学校での二人と全然違うように見えたんです。楽しそうに話す二人の姿はまるで、長年連れ添った仲の良い恋人っていう感じで……。」

あの二人は、昔から僕らとは違いました。大人で、ミステリアスで、頭が良く……。二人の間には、僕たちの入り込む隙間もないような、不思議な空間が広がっているような気がするんです。

二人はいつも、一歩引いたところから、僕たちを見ていました。だから僕は、二人のところへ追いつきたくて、二人ともっと仲良くな

りたくて……。気づくと、コナン君には尊敬の念を、灰原さんには恋心を抱くようになっていました。

でも、この前の二人を見たとき……。二人は、さらに遠くに行ってしまったように感じました。

そんなの嫌です。二人のところへ、僕も行きたい。そしたら、コナン君とは本当の意味での親友になれると思うし、灰原さんは僕のこととを一人の男として認めてくれると思うんです。

灰原さんのことは、小学一年生の頃から好きなんです。今更、あきらめられません。今はまだ、あまり相手にされませんが、がんばって僕を意識させてみせます！

「……どうしたの光彦君。ガッツポーズなんかしちゃって。」

「え？あ、あはは！何でもないですよ。」

危ない危ない。心の中で決意表明したら、思わずガッツポーズしちゃいましたよ。

まあ、とにかく。

「とにかく、二人の関係が少しでも怪しいと感じたら、僕に知らせてください！」

二人ははいはい、といかにも面倒くさそうに頷きました。元太君はまだわかりますけど、歩美ちゃん、君は人事じゃないんですよ、もう！

その時、教室のドアが開きました。あ、蘭さんです。おっと、学校で蘭さんって呼ばないでって言われていたんでした。気をつけないと。

「……みんな、まだいたのね。そろそろ移動しなさい。次の授業始まるわよ。私、教室の鍵閉めないといけないから、急いでね。」

歩美ちゃんが「はい」と元気よく言って、乗っていた机から降り

ました。それを合図に、僕たちも移動を開始します。

それにしても、最近、蘭さんは元気ないようです。授業中も、前までの覇気が感じられなくなった気がします。それは歩美ちゃんも思っているようで、歩美ちゃんがコナン君に聞くと、「…さあな。蘭ねえちゃんにも、色々あるんだろ。」とよくわからない返事をしていました。

「さあな」の前の「…」は一体何なんですか？やはり、コナン君は何か知っていて、僕らに隠しているように思えてなりません。

うーん。コナン君、キミはやはりミステリアスな男ですね。でも、負けませんよ。もしキミが灰原さんと付き合っているのだとしても、いつか必ず、キミから灰原さんを奪ってみせます！覚悟してください！

光彦は一人、決意に燃えていた。

「お疲れさまでした！。」

放課後。部活も終わり、コナンたちは後は帰るだけとなった。

「コナン！先着替えてるぞ！」

「おお。」

コナンは集中していたため、元太の言葉に何も考えずに反応した。

コナンは今、一人で壁打ちを行っていた。壁に印をつけ、その印めがけてボールを蹴る練習である。

「よっ。」

コナンの蹴ったボールは、印のやや上をめがけて飛んでいく。だが、球威を落とさず壁の手前で下方向に急速に落下し、見事印にぶち当たった。

これで、今日のノルマの二十回を達成させたことになる。

「よっしゃ！」

コナンは歓喜の声を上げる。

「はいはい、お上手お上手。」

ぱちぱちと手を叩きながら、灰原が近寄ってきた。

「あれ？オメー、歩美と校門で待ってるって。」

「忘れものしたから取りに来たのよ。別にあなたに会いに来たわけじゃないわ。」

「へーへー。そうですか。」

コナンは苦笑いしながら、足元まで転がってきたボールを拾おうとしてかがんだ。

その時、柔らかい何かがコナンの頭を包む。洗剤の良いにおいがした。

それを手に取ると、真っ白いスポーツタオルだった。

「サンキュ。」

「気にしないで。これは、私の仕事だから。」

照れて赤くなった顔を背ける灰原に、コナンはまた笑った。

「こついうの、ツンデレっていうんだろ。」

「何言ってるのよ、ばか。」

三人と別れたコナンと灰原は、ゆつくりと自宅までの道を歩いていた。

他愛のない話を続けていた二人だったが、不意に灰原が「今日の夕飯私が作ってあげましょうか？」と言った。

「え？オメー料理とか作ったりすんのか？」

「失礼ね。それでも毎日作ってるわよ。お弁当も手作りだし。一応、味は人並みだと思うけど。…嫌ならいいわよ。」

「んなこと言ってねえだろ。ていうか、博士はどうすんだよ。一人じゃかわいそうだろ。」

「博士は新作発表会で、今日はいないわ。」

「あ、そう。」

コナンはうーんと考える素振りをする。

それを見た灰原は、見るからに不機嫌になった。

「だから、嫌ならいいって言ってるでしょう？…どうするの。」

「そうカリカリすんなって。…よし。じゃあ、せつかくだから頼むよ。」

「まったく…。素直に最初からそう言いなさいよ。」

ふいと顔を背けた灰原に対し、コナンは思わず笑みを浮かべる。

今度はコナンから灰原の手を握った。すると、灰原も何も言わず、黙って手を握り返すのだった。

「え…？う、うめえ…。」

「何よその言い方。どういう意味よ。」

コナンの率直な感想に対し、灰原が食って掛かる。

「だいたい、あなたキャンプで私の料理何度も食べてるでしょう？」

「いや、そうなんだけど…。オメーの家庭料理食ったのは今日がはじめてだろ？何か、新鮮っていうかさ。こういうのも作れるんだって思っ…。」

「なにわけのわからない事を言ってるのよ。」

はあ、と灰原はため息をついた。だがその表情は、どことなく嬉しそうだ。

「…そう言えば俺、オメーのことで知らないこと結構多いよな。」

コナンは箸を止め、しみじみとした様子で言った。

灰原も箸を止める。

「…確かにそうね。わたしも、あなたについて知らないことたくさんあるわ。昔のことは特にね。」

灰原は言いながら、肉じゃがのジャガイモを箸でつかむ。柔らかいそれは、持ち上げたときにすぐに割れてしまった。

コナンはぼんやりとその光景を見ていた。

「…あなたは、知りたいと思う？私の過去。」

不意に灰原がそう言った。何も考えず、ただ灰原の手元に注目していたコナンは、その言葉で一気に現実を引き戻されたような気分になる。

灰原の過去。それは恐らく、組織にいた頃のことを指すのだろうとコナンは思う。

そしてそれは恐らく、一番思い出したくない記憶。

「…オメーが話したいなら、俺も聞きたいし、オメーが話したくないなら、俺も聞きたくねえ。」

「…そう。」

リビングを静寂が包む。時計の針が動く音だけが、やけにはつきりとコナンの耳に響いた。

少しして、灰原が口を開いた。

「…私は、あなたの過去、知りたいと思うわ。」

視線は下を向き、声も小さかったが、それでもコナンの耳にははっきりと届いた。

コナンは嬉しそうに笑って、「ああ。」と小さくつぶやいた。

「これから、たくさん教えてやるよ。俺もこれから、オメーのことたくさん知りてえからさ。俺たちの思い出を、これからどんどん増やしていこうぜ。」

満足げな顔をするコナンに、灰原はくすりと笑う。

「…相変わらず、クサイわね、工藤君。」

「…オメーなあ。」

皮肉たつぷりにそう言う灰原に、コナンは苦笑いを浮かべた。

それから、灰原が作った肉じゃがを一口食べて、「やっぱりうめえ。」と独り言のようにつぶやいた。

食事を終え、穏やかな時間をすごしていた二人だったが、コナンは時刻がもうすでに深夜十一時を回っていることに気づいた。

そのことを灰原に言っていると、ちらりと時計を見てから、

「そうね、もう遅いし…。そろそろ帰ったほうが良いわね。」と立ち上がった。

すると、コナンも焦ったように立ち上がり、歩いていこうとする灰原の手をつかんだ。

「…何？」

灰原が不思議そうにコナンを見る。コナンの顔は真っ赤になっていた。

「オメーさえ良ければだけど、その…。き、今日、泊まっていかなえか？」

「え？」

灰原は驚いて、目つきが悪いとよく言われる（余計なお世話だったが）目を大きく見開いた。コナンは相変わらず顔を赤くしたままである。

しばらく驚いていた灰原だったが、しだいに驚きの表情は微笑みに変わっていった。

「…H。」

「バ、バーロー！何もしねえよ！」

「どうかしら？私のパンツ見たり、あなた意外とスケベだから…。」

「いつの話だよ！それに、あれは偶然だって言ってるんだろ！」

「本当かしら？まあ、あなたに女を襲う度胸なんて、あるわけないわよね。」

「このヤロオ…。」

二人の夜はもう少し続きそうだった。

平穩（後書き）

次回工口注意です。

進展と暗転（前書き）

エロ注意です！

進展と暗転

「はあ、はあ、ん、はああ。」

快楽と痛みと罪悪感で頭が真っ白になりながら、自分の上で激しく動く蘭をぼんやりと見つめる。

もう抵抗する気力もなかった。

コナンの体を見ると、いたるところに痛々しい痣が出来ている。口も切っているようで、口元からは血がにじみ出ている。

両手両足とも手錠で固定され、手首足首ともに、手錠でこすれて血が出ている。

ベッドのシーツもぐちゃぐちゃに乱れており、長い間コナンが必死の抵抗を試みていたことが伺える。

だが、抵抗すればするほど、逆に蘭は悦の表情を浮かべ、動きを激しくしてコナンの反応を楽しんだ。

「はあ、はあ。は、ふ、ふふふ、ふふふふふふ。あははははあ。」

「
だらしなく笑う蘭は、もはやコナンの知る蘭ではなかった。」

コナン（工藤新一）は、幼馴染の毛利蘭に、殴られ、縛られ、そして犯されていた。

ことの発端は、一日前にさかのぼる。

ココはある喫茶店。

目の前で憎たらしいくらいニコニコしながら、アイスクーヒーをストローでかき混ぜているのが、私の彼。名前は、工藤新一。今は江戸川コナンと名乗っている。初めて名前を聞いたときは、もっとましな名前を考え付かなかったものかとあきれたものだ。

今日は土曜日で、珍しく部活も休みだったから、二人で映画を見てきた。彼の好きな、ミステリーものだ。

よほど面白かったのだろうか。さっきから、緩んだ顔を隠しもしない。ちよつとかわいいと思ったのは、私の心の中にしまっておくでしょう。

「いやー、なかなか面白かったなあ。最近見た中じゃ、一番だったぜ。」

「ええ、そうね。ま、誰かさんが途中で犯人を言っただけなら、私はもっと楽しめたでしょうけど。」

「うっ。わ、悪かったよ。」

私が皮肉を込めて言うと、工藤君は苦笑いしながら謝ってきた。

「いや、どうもトリックが解っちまうと、止まらなくてよー。誰かに教えたくなくなっちまうんだよ。」

「まったく…。あなたとはミステリーやサスペンス映画、見れないわね。残念。」

「えー!?ま、まあそう言うなって。な?」

どうやら本気で困っているらしい。ま、いじめるのはこれくらいにしておいてあげるわ。

「でも、あの探偵役は名演技だったよなあ。」

「確かに、自然な演技だったわね。でも、演技の点では、あなたも負けてないわよ？まあ、あなたは子供の演技専門だけだね。」

「…このヤロオ。」

そう言ったときの彼の顔がおかしくて、つい笑ってしまう。彼も私につられるように、声を上げて笑った。

私は幸せだ。素直に今そう思う。

形はどうあれ、組織に属していた私に、人並みの幸せを得る権利などないと思っていた。私自身、幸せになる気などなかった。

でも、彼は、こんな私を好いていてくれる。こんな私に優しくしてくれる。

彼の身体を小さくした原因の薬を作っていた私をだ。

彼がいると、私も幸せになっていいんだって思えてくる。

でも、時々、この幸せな気持ちが恐ろしく感じるのだ。今幸せだということは、もし何らかの形でこの幸せが壊れたとき、私が味わう苦しみは一体どれほどのものになるというのだろうか。

組織は工藤君にだいぶ痛めつけられたが、「あの方」と呼ばれる組織のボスと、ジンを含む数人の幹部はまだ健在だ。この先、何が起ころうともおかしくない。それこそ、私か工藤君のどちらかが、もしくは両方が、組織の手にかかり死んでしまうということも、十分に考えられる。

私が死ぬのは別に構わない。

でも、彼が死ぬのだけは、絶対にごめんだ。というかどつちみち、彼が死んだら、私はこの先生きていけなくなるだろう。それぐらい、工藤君は私の中で大きな存在になっている。そして、今この瞬間にも、どんどん膨張しているのだ。

恐らく、近い未来に、工藤君と組織はまたぶつかるだろう。そのときに彼が無茶をしないか、それが今一番心配だ。彼は熱くなると止まらなくなってしまう。昔からそうだ。

今までも彼は無茶をたくさんしてきたが、そのつどなんとか無事だった。だがそれは、生まれもった彼の幸運によるものだ。その幸運が、これからも続くとは限らないのだ。それに、あの組織は『運』などという非論理的なものには少しも頼らずに、ある意味感心するほどの、徹底した冷静さと狡猾さと卑劣さ、そして幹部の確かな実力で今までのし上がってきた本物の悪だ。いつまでも工藤君の幸運が続くとはとても思えない。

幸運、か……。私は、もうそんなものに頼ろうとは思わない。きつと工藤君もそう思っているだろう。

……彼は私を守ってくれと言った。だが、私は守られているだけのつもりは毛頭ない。私も、彼を守り、闘う。この幸せを守るために。

そろそろ組織から逃げ回るのも終わりにしなければ、いつまで経っても先には進めない。

「——い。——おい。おーい、灰原？どうした？急に黙り込んで。」

「え？ああ、ごめんなさい。なんでもないわ。」

しまった。ついつい考え込んでしまった。私の悪い癖だ。

「まあ、いいけどよ。それで、さっきの話だけど。」

「さっきの話？」

まったく聞いていなかった。

「ったく。だから、俺がああ『金田一シリーズ』にゲストとして出演して欲しいって言われたって話だよ。」

「え？あなたが？」

へー。なかなかすごいじゃない。金田一シリーズと言えば、あの有名な探偵モノのドラマよね。昔からやってる。

「まさか、あなた出演する気なんじゃ。」

「バー口。んなことしねえよ。」

それはそうだ。ただでさえ、新聞に何度も載って、組織に知られているかも知れないというのに、ドラマにまで出たら「俺を殺してくれ」と言っているようなものだ。

（ちなみに、なぜ最近が目立った行動を取るのか聞いたところ、「ああ、これも作戦のひとつさ。」とか何とか言っていた。どういう意味なのだろうか？）

コーヒーを一口飲んで、工藤君はしれっと言った。

「だって、俺に殺人鬼の役をやれなんて言うんだぜ？俺には向いてねえよなあ？やっぱ俺は、探偵でないとさ。」

……。はあ、あほらしい。

「あなた、パラパラは踊れるくせに、殺人鬼の役は出来ないのね。」

「なっ！？バ、バカ！」

あら、これは禁句だったかしら。

帰り道。夕日に照らされた坂道を、工藤君と二人並んでゆっくり歩く。

二人の影が、寄り添うように伸びていて、良い感じだった。私は実はこういうの、結構好きだったりする。

だが私たちは、寄り添って歩いているだけで、腕を組むどころか、手を握ってすらいらない。

彼は、自分からそういうことを一切しない（まあ、わたしもあまりしないが）。

そして当然、というか。付き合い始めてもうすぐ一か月経つというのに、私たちはキスすらしていないのだ。

確かに、私の態度にも問題がある。

本当はそういうことをして欲しいくせに、表には決して出さない。我ながら、頑固なことだ。

そして、頭はキれるくせに、女心には鈍すぎる彼に、私の心が読めるはずもなく…。

お互い、今の状況に満足してしまっている、と彼は思っているだろう。焦る必要なんてない、と。

でもやっぱり、私は先に進みたい。恋人だからこそ出来ることをしたい。恋人としての実感が欲しい。

……。

こんなことを考えるあたり、やはり私も女であるということを知っている。知る。

昔は、こんな恋愛なんて、私には遠い世界だと思っていたのに…。

今ではすっかり恋する乙女だ、私も。

と、そのときだった。

私の左手を、暖かい何かが包み込んだ。

それが工藤君の右手だとわかった瞬間、思わず手を握り返していた。すると彼は「やっぱりな。」と笑った。

「…何がよ？」

私は懸命に動揺を隠す。まあ、彼にはすぐにばれるのだろうか。

「オメー、手握って欲しそうだったからな。灰原の眼を見たらすぐに解ったぜ。」

そう言って工藤君は得意げに笑う。

正直驚いていた私は、何も言えなくなってしまった。

……なら。

「…なら、私が今考えてること、わかる？私が今、あなたに一番して欲しいこと。」

私は工藤君の眼を見つめる。

彼の眼はまるで少年のように無邪気なのに、どこか優しい。

私の大好きな瞳。

「…探偵なめんなよ。」

——そう言って、そっと私に口付けた。

甘くて、優しい、けど、ちょっと苦い。初めてのキスは、そんな切ない味がした。

……なんて表現するあたり、やっぱりもう乙女ね、私。

「…工藤君。」

「ん？」

「今日、泊まっていきたいんだけど。」

「…本当に、いいんだな。」

心配そうな顔をする工藤君。でも、意外と落ち着いているようだ。

…なんか面白くない。

工藤君なら、もっとそわそわして落ち着かない態度を取ると思っていたのに、実際そうなのは私ではないか。

一応、私のほうが実年齢は上なのだ（というか薬を飲んでいなければ、私はもうすぐ三十路に突入することになる。なんて恐ろしい…）。年上の私が緊張してどうする。

私は必死に彼より余裕がある風を装う。きっとばれてない、と思う。

「何よ今更。もしかしてあなた、怖いのか？男の癖に情けないわね。」

はあ、とため息をついてみせる。うーん、少し言い方が子供過ぎてしまった気もする。

ちらりと彼を盗み見る。彼の顔はまるで、すねた子供をあやすときの、少し疲れた母親のような感じだった。

…その顔ムカツクんですけど。

文句を言おうとした私の口を、柔らかい何かが覆った。

「…ん。」

ゆっくりと唇を離し、工藤君は少し困ったように微笑む。

「…今くらい、その素直じゃねえ憎まれ口、封印してくれよ。」

「…考えとくわ。」

気の利いたことが言えない自分に腹が立つ。ごまかすように、今度は私からキスをする。

今日帰ってから何度もしてきたせいか、キスには大分慣れてきた気がする。もう自分からできる。相変わらず、心拍数はすごいことになっできるが。

ふと閉じていた眼を開くと、工藤君の顔が間近にあった。

…見れば見るほど整った顔だ。少しだけ切れ長気味の眼に、つんと高い鼻。身長は174cm、体重58kg。線が細く、女装したらきっと綺麗だろう（あまり見たくはないが）。この容姿に加え、スポーツ抜群で頭も良い（というか良すぎる）という、完璧な才色兼備。少し自信家だが、それでも周りの人望は厚い。よって、女の子にもモテモテだ。

正直、非の打ち所がない。まあ、彼女目というのもあるだろうが。

こんな工藤君に、私は釣り合っているのだろうか。

こんな時に、つついそんなことを考えてしまう。

「んっ！」

口の中に急に入ってきた柔らかいもの、彼の舌に驚いてつい声を上げてしまう。

その声に、彼は一瞬舌を戻すが、またゆっくりと私の中へ進入して

くる。

それはなぞるように、私の口の中をゆつくりと動く。私も最初は戸惑っていたが、徐々に彼に応えていく。静かな部屋の中で、瑞々しい、卑猥な音が響いた。

そして、そのいやらしい音の原因が私と工藤君であるという事実。先ほどまでがちがだった私の身体は、興奮で少しずつ溶かされていく。

私と工藤君は今この瞬間、確かに愛し合っているのだ。

身体が熱い。

もっと激しくキスして欲しい。

私の身体に触れて欲しい。

また私の考えていることを読み取ったのだろうか。工藤君はキスしたまま、私をベッドに押し倒した。

そして、私の身体を、ゆつくりと撫でる。

「あつ。」

声が出てしまった。：恥ずかしい。声なんて、男を喜ばせるために女が仕方なく出すものだと思ってたけど…。実際、出てしまうものなのね。

それから、彼はまたゆつくりと服を脱がせにかかる。

：なんかやたらと手際がいいわね。誰か脱がせたことあるのかしら。

そんな考えも、工藤君が私の胸にキスをしてきたことで、すっかり頭から消えてしまった。

「んんっ。」

また声が…。

工藤君はそんな私など気にも留めず、私の身体のいたるところにキ

スをはじめた。そのたびに、私は否が応でも反応してしまう。彼の手も休むことなく、せわしく動かしている。

「男ってやっぱり、無条件で胸が好きな生き物なのね。あなたも例外じゃないみたい。」

自分で考えて、くすつと笑ってしまう。胸の位置にある工藤君の頭を、優しく撫でてあげた。

なんだ、私も結構、余裕あるじゃない。

そう思っていていられたのも、彼が私の下半身に手を伸ばすまでだった。

「っ!？」

今までの比ではない、強い電流が体を駆け抜けた。

「ひっ、あっ。」

声にならない。

初めてだと言うのに、十分にぬれていたそこは、時折いやらしい音を立てた。

「あっ、ああっ!んぐっ。」

声が大きくなってきた私の口を、工藤君がキスでふさぐ。

「んんっ。んー!」

工藤君の舌に、私のを絡める。されるがままの私の、必死の抵抗だった。

初めてだからよくわからないが、でも、確かに、気持ち良い、と思う。考える余裕なんてないけど。

頭がとろとろに溶けていくような感覚。寝ているのに、浮いているような。

キスだけで、工藤君とひとつになれた気さえする。

工藤君。

そう叫びたい。でも、キスされていて、それがかなわないのがもどかしい。

工藤君。

私を好きになってくれて、ありがとう。

決してかなわない恋だと思った。影からサポートするだけでいいと思っていた。

でも。

でももう、影から支えるだけじゃだめだ。前よりもずっと好きになつてしまった。

あなたとずっと、ずっとこのまま生きていきたい。

「っはあ。」——好き。」

工藤君が唇を離れた瞬間、私は思っていたことを口にした。

「え？」

「好き。あなたが、好き。工藤君。愛してるわ。」

一瞬驚いた表情をした工藤君も、次の瞬間には暖かい笑みを浮かべていた。

そして、私の頬にそつと口付けたあと、

「俺もだよ。哀。」

と私の耳元でささやいた。

その瞬間、なぜか涙が出てきた。こらえようと思っても、溢れる涙は一向におさまる気配はない。

「うつ…。うつ…。」

「ったく。泣くなよ。」

工藤君は優しく私の涙をぬぐってくれた。

「綺麗だぜ、灰原。」

「…それ、本当？」

「ああ。すっげー綺麗だ。」

「…ありがとう。」

破瓜の痛みは強烈だったけど…。

そんな痛み気にならないほど、私はあの時、本当に幸せだった。

「じゃあ、私先に行ってるわね。歩美に呼ばれてるから。」

「ああ。でも、ホントに俺も一緒に行かなくてもいいのか？」

「あなたねえ。ただでさえ、あの子たち感づいてるかもしれないのに、一緒に行ったらもっと怪しまれるでしょう？」

「…だよなあ。」

次の日。

部活があるため、余韻を楽しむなどということは出来なかったが、それでも二人には特に未練がましい様子は見えない。

「あつ、そうだ。灰原。」

コナンが思い出したように言う。

「何？」

「オメー、その…。大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないわよ。誰かさんのおかげでね。…歩くのも結構キツイのよ?」

「…ごめんなさい。」

素直に謝るコナン。

コナンのしかられた子供のような顔を見て、灰原はくすつと笑う。

「じゃあ、行ってくるわね。あなたも、ご飯食べたらさっさと来なさいよ?」

「へいへい。」

玄関が閉まるのを確認して、コナンはリビングに戻る。テーブルには、灰原が体にむちうつて作ってくれた朝食が並んでいた。

(さっきのやり取りといい…。まるで、新婚みてえだよな…。)

そんなことを思いながら、パンにかじりつく。口元がにやけて、カスがぼろぼろ落ちている。

いきなり、チャイムが鳴った。

まだ寝巻きだったので、出るのは億劫だったが、こうしている間も、チャイムはせかすように何度も何度も鳴らされている。

(灰原のやつ、忘れモンでもしたか?)

そんなことを考えながら、急いで玄関に向かう。

その間も、チャイムは何度も鳴っている。

「はい！今出ます！」

大声でそう叫ぶも、チャイムは止まらない。

(こりゃ灰原じゃねえな。誰だよ、こんな朝早くに。)

「はい。どちら様で——」

扉を開けると、そこには蘭が立っていた。

その表情には生気がなく、人形のように無表情だった。

その顔見て、コナンに寒気が走る。心臓を凍らされたような、身もすくむ不気味な感覚。ぞっとした。

「ら、蘭。どう——」

どうした、そう言おうとしたコナンだったが、突然起こった腹部の激痛に、それどころではなくなった。

見ると、自分の腹に、蘭の右ひざがきれいに入っていた。

「ぐうっ。」

うめいてしゃがみこもうとするコナンの髪の毛をつかみ、起き上がらせる。

そのまま、もう一発、今度は拳を腹にたたきこんだ。

「がっ」

そして、どん、とコナンの肩を押すと、コナンはそのまま崩れるように床に倒れこんだ。

うめき声を上げて苦しむコナンのズボンを、蘭が乱暴に脱がせようとする。

それに気づいたコナンが、苦しみながらも止めようとするが、蘭は顔を殴ることで黙らせる。

かすむ意識の中見えた蘭の表情は、先ほどとは違い、憎しみで満ち溢れているように見えた…。

監禁？（前書き）

これから蘭のターンが続きます。
エロ、そして人格崩壊注意です。

監禁？

練習は開始されたが、工藤君はまだ来ていない。

サッカー小僧の彼が、今まで部活に遅れてくることなんてほとんどなかった。

もしかして、何かあったんじゃない――

まさか……。

私の頭に最悪のイメージが浮かぶ。

まさか、組織が彼を――

私は乱暴ににスカートのポケットから携帯を取り出し、工藤君に電話をかける。

お願い。

出て。

お願い――

『もしもし？灰原か？』

3コールめで普通に繋がって、私は思わず安心して座りこんでしま
いそうになった。

「もしもしじゃないわよ。あなた、何してるの？もう部活始まっ
てるわよ。」

『ああ、悪い悪い。それでな灰原、俺風邪ひいたみたいだよ。今日
部活休む。』

「はあ？」

風邪ですって？

「今朝は平気だったじゃない。ホントに風邪？何か他に理由がある
んじゃない——」

『ないって。マジで風邪だよ。昨日、裸で寝たのが間違いだったか
な。ハハ。』

笑ってる。

どうやら大丈夫そうね。

「まったく…。だったら電話くらいしなさいよ。心配するじゃない。」

『…何様よ、あなた。』

「え？何か言った？」

工藤君は絶対何かつぶやいた。ぼそぼそして聞き取れなかったんだ
けど。

『いや、なんでもねえよ。ああそれと、別に見舞いとかはいらねえ
からな。じゃ。』

切れてしまった。

ツーツーという電子音が耳に響く。

何かしら。この、妙な胸騒ぎ。胸の中で蛇が動き回っているような…。

それに、さっきの会話、なんか少しひつかかるのはなんでかしら…？

「灰原さん！コナン君はどうしたんですか？」

「ああ、円谷君。彼、風邪らしいわ。帰りにみんなでお見舞いに行つてあげましょう。彼のサッカー出来なくて悔しがってる顔、見物じゃない？」

……彼の身に何もなければいいのだけれど。

『もう新一！聞いてる？』

…ん？

『やだ！蘭がいい！蘭のママがいい！』
なんだ…？

『ちよつと新一？まじめに掃除してよ！』
これは…。蘭、か？

『新一あれ見て！かわいい。』
俺の記憶の中の…。

『写真撮ろうよ！あのパンダと！』
はは、若えな、二人とも。まだ小六くらいか？
確か、二人で動物園に行ったんだっけ。

『新一！今日の試合がんばってね！応援してるから！』
これは…。

懐かしいな。俺がはじめて試合に出たときだ。
あいつ、あんな暑い中、俺のために力いっぱい叫びやがって…。

『ねえ、新一。』
なんだよ、蘭。

『私が空手の都大会で優勝したら、トロピカルランドに連れてって
よ！』

そうだ。この約束をしたことで俺は。
俺と蘭は――

コナンが目を醒ますと、見慣れた天井が見えた。
どうやらコナンが横になっている場所は、彼の家の寝室のようだった。

キヨロキヨロと辺りを見回すが、特に変わった様子はない。

一瞬、今朝の事は夢かと思ったコナンだったが、体を起こした時の節々の痛みが、今朝の出来事が紛れもない事実だったという事を如実に物語っていた。

不意に、寝室の扉が開く。入ってきたのは、案の定蘭であった。その顔は、コナンの意識が途切れかけた時に見えたあの憎悪は消えていて、不気味なくらいに落ち着いていた。むしろ心なしか明るい表情をしているようにも見える。

コナンは痛む体を無理に起こし、蘭と対峙する。

「…どういっつもりだよ、蘭。」

「何が？」

「とぼけんな。今朝のあれだよ。」

「ああ、あれ？」

蘭は手をぼんとたたいた。

「殴って黙らせて、無理矢理やって、それで既成事実でも作ろうと思ったんだけど…。新一、気絶しちゃったから。どうせならやっばり、新一が起きてるときにやろうと思って。」

にこにこ蘭が笑う。

ぞくり。

その瞬間、コナンの背中を冷たい汗がつつた。まぶたもひくひくと動いている。

無意識のうちに、コナンの足が一步後ろに退いていた。

逃げなければ――

黒の組織との度重なる対決により身についたコナンの危機察知能力が、この場が危険だと教えている。

ここには、何をされるかわからない。

この部屋から出るルートを必死に模索するコナンだったが、たった一つの窓は蘭により釘と板でふさがれていて、退路は寝室の扉のみである。

蘭をどうにかしない限り、脱出は不可能だった。

コナンは願いを込めてポケットを探る。

手に感じるひやりとした感覚。

あった。

時計型麻醉銃。

この状況で、コナンの持つ唯一の武器であった。

「その麻醉銃ひとつで私とやりあう気？」

「！？」

コナンの心臓が大きくびくと跳ねた。

「それ、一発しかないんでしょ？やめたほうが良いよ。」

蘭は麻醉銃などまったく怖くないといった感じで、体から余裕がにじみ出ている。

「…へっ。やってみないとわかんねーぜ？」

強がったコナンだったが、内心は余裕のかませる状態ではなかった。麻酔銃の針はたったの一発。針のストックは違う部屋に保管してある。

はずせば、終わり。

「ああ、それとね。」

蘭の唇が不気味に歪む。

「私に歯向かうってことは、それなりの覚悟をしてるってことなんだよね、新一？」

コナンの体に恐怖の鎖が何重にも巻きつき、コナンの抵抗する意思をそごうと締め付け始める。

蘭の空手は本物だ。

本気を出せば、正拳突きで電柱に穴を空けてしまうほどの実力。

どんなに大男であろうが、蘭の蹴りを喰らって立っていられる者はいない。

自分など、ものの数秒で沈められてしまうだろう。

コナンの頬に汗がつつたう。

怖かった。

目の前の幼馴染が。

震える手で狙いを定める。

蘭。今日のお前はいつもの蘭じゃねえ。

俺しかあいつを元に戻せる人間はいねえんだ――

その思いを糧に、恐怖を押し殺した。

「蘭。もうやめろ。こんなことしたって――」

「はあ。やっぱり素直に私の言うこと聞いちゃくれないよね。しかたない。」

次の瞬間だった。

蘭は低い大勢から、コナンに突進してきたのだ。

正面から襲ってきたことに驚いたコナンだったが、このような事態も想定していたため慌てなかった。

コナンは突っ込んでくる蘭に向けて冷静に麻醉銃を撃った。

だが、蘭はそれをまるで軌道が読めていたかのように、数センチ体を横にずらして避けた。

「な！？」

気づいたときには、蘭の拳がコナンの頬を殴っていた。

「うあつ…。」

コナンは叫び声をあげて吹っ飛んだ。

たった一撃で意識が飛びそうになる。

蘭はコナンの顔をつかんで無理矢理自分のほうを向かせた。

「私、言っておくけど、拳銃の弾だって避けられるんだから…。」

コナンの耳元でそうささやく。殴った頬を優しく撫でた。

「痛い？気絶しないように手加減はしてるけど、あんまり新一が反抗すると、手元が狂っちゃうかも。だからおとなしくしててね？」

蘭はにやりと笑って、コナンの唇を乱暴にふさいだ。

そのまま舌でコナンの口の中をかき回す。

「んぐつ!？」

先ほどの一撃で口内を切っていたコナンが、痛みで思わず声を上げる。

そんな反応をみた蘭は、嬉しそうに目を細めると、より乱暴に舌を動かした。

舌が動くたび、傷はちりちりと痛んだ。

コナンは両手で蘭の体を突き飛ばそうとするが、蘭はピクリとも動かない。

「んー!んー!」

「ぶはつ。つたくもつ、新一?」

蘭がおもむろに腕をふりこのように後ろにもっていくと、その腕は流れるようにコナンの腹にぶち当たった。

「ぐあっ!」

「私の言ったこと、わからなかった?」

苦しむコナンをベッドに押し倒す。

そして組み敷くように両手を押さえたあと、両膝でしっかりとコナンの体を固定する。

「ああ、それと。」

どこから持ってきたのか、さび付いた手錠を取り出しながら蘭は思い出したように言った。

「哀ちゃんから電話あったから、代わりに出ておいたよ。あの、蝶ネクタイ型変声機だっけ?あれ使って。」

手錠を丁寧につけていく。

「それでね。お見舞いはいらなくて言うておいたから。だからね――」

べろりとコナンの頬を舐めてから、鼻と鼻をくっつけて、ゼロ距離から蘭は言った。

「
二
人
っ
き
り
だ
ね。
し
ん
い
ち。
」

監禁？（後書き）

『漆黒のチエイサー』を見たら…。

蘭のやつ、拳銃の弾避けてましたよ…。

本当に人間なのか…？

監禁？（前書き）

エロ注意です！

監禁？

今朝になって新一の部屋に仕掛けていた盗聴器のことを思い出すとは、神様も間が良いというか悪いというか…。

ここ一月ほど、私の精神状態は決して良いとは言えなかった。学校では私の暗さが生徒にも伝わっていたようで、歩美ちゃんなんかは私に元気が出るようにと、かわいく飾ったお手紙をくれたりした。それで余計に惨めになった、なんてことは、口が裂けても言えないけれど。

ちなみに原因は言わずもがな、新一のことだ。

学校に行くとな新一に会わないといけない。

会えるのに話すらまともに来れないという辛さは、私の心をどんどん削り取っていった。

しかも。

どうやら、哀ちゃんとはうまくいったらしいのだ。

学校ではなるべく普段と変わらない風になっているつもりだったのだろうが、私にはすぐわかった。

二人は付き合っている。

二人の仲むつまじい場面を見るたび、嫉妬で頭がおかしくなりそうだった。

何度飛び出していこうとしたかわからない。

そんな学校は私にとって、地獄のような場所であった。

あの日。

阿笠博士の家で新一と話合った時は、もう新一のことは諦めようと本気で考えたと思う。

だが、約束したからとはいえ、目の前にいるのに会話も出来ない、目も合わせられないという毎日は、逆に私の想いを加速させた。何をしても、新一のことばかり考える。

ご飯を食べているときも、トイレにいるときも、智明さんと話しているときも、授業中も、寝るときも。考えるのは新一のことばかり。夢にまで出てくるくらいだ。

もう私は病気だ。自分でも解るくらいの。

病名はそうねえ…。『新一依存症』って感じかな。

唯一の薬は、新一から私へのたっぷりの愛。なんちゃって。えへへ。

で、今朝。

本当に偶然。私の作業机からイヤホンが垂れていたのをきっかけに、例の盗聴器のことを思い出した。

なんとなく。

決して下心があったわけではない。本当に、なんとなく、イヤホンを耳につけた。

いけないことだとは思った。でも、話も出来ない寂しさで、やめようとは思わずに思わなくて。ちょっとだけ。

ほんの少しだけでいいから、新一の声が聞きたかった。

でも良く考えたら、新一が一人で勝手に話すわけないことにすぐに気づいて、わたしは思わず笑い出しそうになった。
なにやってんだろ私。

自分がますます惨めに思えて、イヤホンを耳からはずしかけたその時だった。

耳を疑うような声が聞こえてきたのは。

『じゃあ、私先に行ってるわね。歩美に呼ばれてるから。』
え？何これ？

『ああ。でも、ホントに俺も一緒に行かなくてもいいのか？』

『あなたねえ。ただでさえ、あの子たち感づいてるかもしれないのに、一緒に行ったらもつと怪しまれるでしょう？』

この声って——哀ちゃん？

『…だよなあ。』

なんで、こここんな、ああ朝早くにいいいの？

あ、そ、そっか！迎えに来たのよ。ああ哀ちゃんの家と隣どうしだし。そうに決まって——

『オメー、その…。大丈夫なのか？』

『大丈夫じゃないわよ。誰かさんのおかげでね。…歩くのも結構キツイのよ？』

は…？

『…ごめんなさい。』

何、今の会話。
どういう意味？

もしかして二人は昨日――

『じゃあ、行ってくるわね。あなたも、ご飯食べたらさっさと来なさいよ?』

『へいへい。』

なによ、その夫婦みたいな会話は……!

この瞬間、私の中の大事な何かがまた音を立てて崩壊した。

気づけば私は無線機をぶち壊していた。

足が勝手に動く。

玄関を開けて外へ出る。

目指すは、新一の家。

?だめよ!これ以上新一を困らせないって決めたじゃない!?

黙れ。

?あの日の約束を嘘にするというの!???

黙れ。

？し、新一には哀ちゃんが――？
黙れ。

？だ、だから…その…？
だ・ま・れ！

私の中の天使は、悪魔の剣幕におされ、小さくなってしまっていた。

もう、何がどうなっても良かった。

先のことなんて知らない。

私は新一じゃなきゃだめなの。誰にも渡したくない。

新一は、私のもの。

我慢は今日で終わりだ。新一を手に入れる。死ぬまで傍に置いておく。

そして。

あの泥棒猫。あの生意気な泥棒猫だけは一生許さない。

新一も許さない。私というものがあいながら、あんな女と。

お仕置き、しないと。

そう考えた私は、一度立ち止まって、家に戻った。

お父さんからもらった手錠を手取る。そうだ、園子からもらった

あの薬ももっていこう。

ふふふ。

新一、どんな顔するかなあ？泣いちゃったらどうしようかなあ。

ふふふ。えへへ。あはははは。

「どう？気持ち良い？」

「んぐう。ううう。」

「猿轡、邪魔？とってあげようか？」

「んんー。つぶはあ！はあはあ、っら、蘭！もうやめろって！」

「ここを、こんなに、固く、しておいて、やめろは、ないんじゃない？」

まあ、本当は私の打った薬のせいなのだが。

「う、くそ！いい加減にしろよ！！」

「ちよ、静かにしてよ！」

私は頬をはたく。

痛みに顔を歪める新一。

はは、良い顔。私が新一にこんなことするなんて、昔は思っても見なかったなあ。

興奮してきた私は、新一の口を貪る。

口の中はすでに傷だらけなので、舌を動かすたびに新一はかわいい反応をする。

それがさらに私を興奮させる。

私、もともとSだったのかな？

「ちゅ。…ふう。ねえ、新一？」
「…。」

新一は声を出さない。

私は腰を激しく動かす。

「うっ…。」

必死に耐える新一。かわいいなあ。

「哀ちゃんと私、どっちが気持ち良い？昨日、寝たんでしょ？」

その瞬間、新一の眼は大きく見開かれる。

口もだらしなく開いてしまっている。

「な、何を——」

「しらばつけないで。ねえ、どっち？」

私はさらに激しくする。

「うぐっ。」

新一は唇をかんで必死にこらえている。もうイキそうなんだ。

「ねえ、どっち？」

「…。うっ、く…。」

「答えなさいよ！」

私はまた頬をはたく。先ほどのもあわせて、新一の顔は真っ赤だ。

「へ、へっ。は、灰原に、き、決まってんじゃねえか。バーロー。」
だが、ぶたれたのにも関わらず、新一は傷だらけの顔で笑っていた。

何だよ…。

むかつくわね…！

「あ、そう。じゃあ、どんなにしても、絶対イかないわよね？」
思い知らせてあげる。

私はラストスパートをかける。新一のはますます固さを増し、大きくなってゆく。

「や、やめっ。」

新一、気持ちいいんだ。びくびくいつてるもん。

私も気持ち良いよ新一。

私も、こんなに感じてる。

ああ、新一…。

「しんいちい！ああああ！！！」

ゴムもなしの完全無防備だったそれは、勢いよく私の中に注ぎ込んだ。

蘭がリクライニング機能を使いベッドを起こし、17時に夕飯の支度をするといって部屋るまで、コナンたちはほとんどベッドの上にいた。

蘭が部屋を出てから、脱出の方法をひたすら考えていたコナンだったが、両手両足がふさがれている状況では、外部の人間に頼るしか手はないようだった。

明日になれば、きっと仲間たちが様子を見にやってきてくれるだろう。そのときに、声は出せずとも、大きな音を出すなどの何かしらのアクションを起こせば良い。あっちには灰原や、頭の良い光彦もいる。それに、たくさんの事件に関わってきたあいつらなら、きつ

と異変に気づいてくれるはず。

それまでの辛抱だ、とコナンは考えた。

そして18時頃、蘭が戻ってくる。

蘭はシチューのような料理と、コナンがあらかじめ買ってあったパンをトレイに乗せて持ってきた。

「新一、疲れたでしょう？さ、食べて食べて。」

「……いらねえよ。」

蘭はコナンが食べない様子であるとわかったと、スプーンを手に取り、シチューをすくった。

「はい。あーん。」

だが、コナンは口を開かない。代わりに、怒ったように蘭をにらみつけるだけであった。

「んもつ、意地っ張りなんだから。」

そう言つて、蘭はコナンの腹に思い切り拳を打ち込む。

「ぐあつ。」

コナンは苦しみの悲鳴を上げる。

その口の開いた瞬間に、蘭はスプーンを押し込んだ。

「……素直に食べれないんだったら、こつするけど？」

コナンはもう、従うしかなかった。

「おいしかった？」

コナンが完食すると、蘭は期待した眼でコナンにたずねる。コナンは正直味が良くわからなかったのだが、下手なことを言つと何をされるかわからないため、一言「ああ。」とだけ言った。

「よかったー。実はね、あのシチューの中にはね、隠し味がたくさ

ん入ってるの！」

コナンは隠し味が何なのかが死ぬほど気になったが、今はそれどころではない。

蘭に聞きたいことはたくさんあるのだ。

「なあ、蘭。」

「ん？何？」

「…なんでこんなことするんだよ。」

「新一が好きだから。」

「えっ」

突然、そして真顔で言っただけの蘭に、コナンは一瞬ひるんでしまった。

だが、次の瞬間にはふつつとした怒りがこみ上げていた。

好きだから、だと？

自分はこんな目にあっているというのに、その一言で片付けるといふのか？

「オメーな…！『好きだから』、で済まされる問題じゃねえぞ！自分が何をしたのかわかってんのかよ！これは完全に犯罪だぞ！？」

大声でまくし立てるコナン。その様子を、蘭は黙って見つめている。

「おい！聞いているのかよ！」

「聞いているわよ。」

興奮して声を荒げるコナンとは違い、蘭はいたって冷静に見えた。それがコナンの怒りをさらに増幅させる。

「このっ…！」

「新一が好きなの。『私、新一のことがだーい好き！』…ふふふ、

これ、‘コナン君’がはじめて家に来たときに、一度言つたよね？」

蘭は急に、表情に陰を落とす。

コナンに寒気が走る。

今日何度も見てきた、蘭の狂気に満ちた表情。

蘭はコナンの上にまたがると、勢い良くコナンの肩を両手でつかみ顔と顔を寄せた。

万力のような力が、コナンの肩にかかる。

「ぐっ」

「いい？私にはこれが全てなの。新一が、私の全てなの！誰にも、絶対渡さないわ。そのためだったら、何でもする。我慢はもう、やめたの。後のことなんて知らない。新一さえいれば、それでいいの。」

蘭はそのままキスをしようと、唇を尖らせコナンのそれへと近づけていく。

だが、コナンは顔をそらしてそれを拒否した。

「…新出先生は、どうするつもりだよ。」

コナンの言葉に、蘭は一瞬動きを止める。

「…別れるわ。なんとなく流れて結婚までしちゃったけど、好きだから結婚したってわけじゃないし。良い人だけだね。」

そう言つて蘭は笑つた。だが、その笑顔は明らかに作り物であつた。

「…今ならまだ間に合う。いつまでも俺に縛られてねえで、新出先生とこれから生きろよ。あの人なら、絶対お前を幸せに——」

「だーかーらー。」

コナンの話を途中で無理矢理切つて、蘭はコナンにキスをする。

「んんっ！」

「んー。……ぷはあ。はあ、はあ。だ、か、ら、何度も言ってるで
しょ？私は、新一じゃないとだめなんだって。ね？」

たつぷりと時間をかけてキスを楽しんだ後、蘭が嬉しそうに言った。
「それに、新一だってまんざらでもないんでしょ？」

「な、なに？」

「だって、もし本当に嫌なら、私が舌を入れたときに噛み付けばいい
じゃない。それをしないってことは、本心では嫌じゃないってこ
とでしょ？」

そんなことをしたら、オメーに何されるかわからねえだろ、とは言
えなかった。

「それに、あんなに中に出しておいて。ホントは嫌だった、なんて
言わせないわよ。」

蘭はにっこりと笑う。

「……まあいいわ。さ、新一。続き続き。」

そう言って、蘭が服を脱ぎ始めたその時だった。

『ピンポーン』

電子音が、コナンの家に響き渡った。

「コナンくん！お見舞いに来たよー！」

監禁？（後書き）

実は自分は浪人生でして、更新は二日に一回、たまに三日に一回くらいのペースになると思います。

ちなみに、勉強全然しないでコナンばかり読んでるだめ人間です…（泣）。

そろそろ本気でやらないとやばいかな…。

監禁？（前書き）

この作品には、『名探偵コナン』の漫画、アニメで使われている台詞をそのまま載せたりしている場面があるので、それを探して読むのも面白いかもしれません。

監禁？

「来るなって言ったのに……！」

私はあまりの怒りに、思っていたことをつい言葉にしてしまった。

新一を見ると、安心しきった顔でかすかに笑っている。

何よ、その顔は……。

私というのがそんなに嫌なの？

私が怒りをぶつけようと、腕を振り上げたその時だった。

新一が大きく息を吸い込んでいる。

ま、まさか――

「おい！オメーらぁ！」

新一が大きな声でそう叫んだ。私は驚いて動きを止めてしまう。その隙を見てか、新一がまた息を吸い込んだ。まずい、また叫んでしまう――

「けい――んぐつ」

間一髪のところ、新一の口を手のひらで覆った。

油断した。

あの子達に聞こえてしまっただろうか。

別に、新一を縛っていることがばれるのは全然怖くないが、新一とこれから暮らしていく上で、いろいろと面倒なことになる。

というのも、私はもう少しこの状況を楽しんだ後（新一が素直に私の言うことを聞くようになるまでは続けさせてもらおう）、新一とともにどこかに消える予定だからだ。

ひっそりと、二人だけの生活を送るのだ。念願の二人暮らし。考えただけでわくわくするな！。

回りの人間は私たちを探しにくるだろう。でもそんなことは関係ない。愛し合っている私と新一なら、どこまででもいけるだろう。愛し合う二人の邪魔は、誰にも出来ないのよ。

なんて考えている場合じゃないわ。

私がおたもたしている間に、またチャイムが鳴ってしまった。

新一は新一で、どたどたとなにやら暴れているし…。

ああ。

ふーん。なるほど？

なるほどね。音を立てて、玄関先にいるあの子達に異変を知らせようってわけ。

そこまでするなんて、必死じゃない新一。

でも、この状態の新一をこのままにしておくと、何しかずか解ら

ないわね。

私は、懷から新一の腕時計の形をした麻醉銃を取り出す。
さつき部屋を出たときに、針は補充しておいた。

暴れる新一に向かって、私は針を打ち込んだ。

ごめんね新一。ちょっと静かに眠っててね。

新一が眠ったのを確認すると、私は部屋を出た。

さて、どうしようかな。

「どうしたんだろう、コナン君。何かあったのかなあ？」
そう言つて、歩美が心配そうな顔をする。

「確かに、変ですよ。さっきの大声、聞こえました？」
と円谷君。

「ああ、聞こえた聞こえた！なんか、必死な感じだったよな！」
小嶋君が大げさな身振りで説明した。

今朝の電話での彼に違和感を覚えた私は、彼の家まで来ることに決めていた。

彼の身に何かあったとすれば、確率は低いが組織が関わっているかもしれない。そう思ったからだ。

もし組織が関わっているなら、歩美たちを連れてくるわけにはいかなかったのだけど…。ついてきてしまったものは仕方ないわよね。

…まあ、元はといえば私が誘ったんだけどね。

それに、もし組織に彼が…。考えたくはないけど、殺されてしまったいたら、私を含め、この子達も今こうして話などできないだろう。そして、今こうして生きているということは、組織ではない可能性のほうが高い。だから恐らく問題はないと思うけど…。

やっぱり、組織でないにしても何か起きている気がするならない。大声が聞こえたり、がたがたともみ合う音が聞こえたり。

確かに、それだけで彼の身に何か起きているのではないかと考えるのは、いささか神経質に思われるかもしれない。

でも、ここ数年の組織との死闘により私に身についた危機察知能力が、何かあると告げているのだ。

「ねえ、哀ちゃんはどう思う？」

「え？あ、ああ。えっと…。」

急に話しかけられて、言葉が見つからなかった。

そんな私を、小嶋君が不満げな眼でにらんでいた。

「おい、灰原！おめーもまじめに考えろよ！」

「え、ええ。ごめんなさい。」

…ここは素直に謝るべきよね。

「ところで、さっきの声、なんて言っていたか解る？」

「たぶん、ですけど…。『おい！オメーら』って言ってたような…。」

「

「私も！私もそう聞こえた！…何が言いたかったんだろう？」

私の問いかけに、円谷君と歩美がそれぞれ答えてくれた。

「私もそれは聞こえたんだけど…。その後にもなにか言いかけた感じじゃなかった？」

「え？そうですか？僕は聞こえませんでしたけど…。」

「私も聞こえなかったけど…。」

「俺も。空耳じゃねえのか？」

私以外はどうかやら聞こえていないらしい。

小嶋君の言つとおり、私の聞き間違いかしら。

でも、確かに聞こえたと思ったんだけど…。『け』か『き』だったような…。

私が考えにふけっているとき、不意に玄関のドアが開いた。

そこに立っている人物を見て、私は自分の眼を疑った。

「あら。みんな来てくれたの？」

「あー！蘭お姉さん！」
歩美が元気いっぱい笑顔でそう言った。

予想通り、来ていたのは歩美ちゃんだけでなく、光彦君と、元太君と、そして――
あの泥棒猫だった。

「哀ちゃんもお見舞いに来てくれたんだね。コナン君が聞いたら喜ぶと思うよ。」
「……ええ。」

何よ。

それだけ？

「蘭お姉さん、コナン君の看病してあげてたの？」

「うん。コナン君から連絡があつて。『体調が悪いからちょっと来て欲しい』ってね。」

「へー…。私には何も言つてくれないのに…。結婚していても、やっぱり蘭お姉さんは特別なのかなあ…。」

いいこと言つじゃない、歩美ちゃん。

…そう言えば、歩美ちゃんもアイツのこと好きなのよね。

ま、問題ないか。歩美ちゃんが好きなのは『コナン君』だから。

「彼は昔からですからね。事あるごとに、蘭姉ちゃん、蘭ねえちゃん、つて。少し甘えすぎですよ。ね、ねえ、灰原さん？」

「…ええ、そうね。」

そう。

問題があるのは、この女だ。

「…さつき、大きな声と音が聞こえてきたんだけど。」

哀ちゃんも淡々とした口調で言う。

まったく、さつきから何よ、その態度は。

年上に対する礼儀がまったくなくてないじゃない。

「え？ああ、うん。さつきね、ちょっと、ゴキブリが出ちゃつて。

それで少しどたばたしてたから、その音じゃないかな。」

「江戸川君の声で、『おいオメーら』って聞こえたんだけど。あれは何だったの？」

あちゃー。

やっぱり聞かれてたか。

「え？そんな声が聞こえたの？…変ね、コナン君は今寝ちゃっているから、そんなはずないんだけど…」

「でも、確かに聞こえたわ。」

もう、しつこいなあ。

少し危険だけど、仕方ないわね。

「そうだ！せつかく来てくれたんだし、コナン君の様子見ていく？もう寝ちゃってるから、部屋の様子を見るだけにしてもらうけど…」

それでもいいかなあ？」

「うん！ありがとう蘭お姉さん！」

元気良く返事をする歩美ちゃん。

ホントに君はいい子ね。

「ほら、見て？寝ちゃってるでしょ？」

部屋のドアを少しだけ開けて、中の様子を見せる。

そこには、規則正しい寝息を立てる新一がいた。

毛布をかけて正解だったわね。体中のあざを見られなくてすむし。まあ、顔も殴ったけど、この位置からじゃ見えないしね。

「ホントだ。寝ちゃってるね。」

「だな。でも、だったらあの声誰の声だ？」
「きつと、隣の家の声だったんですよ。」

ふふふ。

やっぱりそうだ。

この子達は、私を怪しんだりすることは一切しない。

まあ、今までの私と『コナン君』の関係を見ていれば、疑うことが出来る人などいないと思う。

面倒見の良い『お姉さん』と、お姉さんを慕う『弟』くらいにしか見えていないのだろう。

でも、問題はこの子だ。

この子が素直に信じてくれるわけが――

「そうみたいね。さ、彼もたいしたことないようだし、差し入れだけ置いて私たちはそろそろ帰りましょう。ずっとここにいても邪魔だろうしね。」

――あれ？

「そうだね。帰ろっか。蘭お姉さん、コナン君によろしくね。」

「お邪魔しましたー。」

「お邪魔しましたー。」

「あ、う、うん。ばいばい。」

そんなことを言って、本当に帰ってしまった。

なーんだ。

なんだかんだ言って、やっぱりまだまだ高校生ね。

ちょっと拍子抜けしちゃった。

ま、いいわ。結果オーライだし。

さあ、新一を起こして続き続き。

さつきからうずいてうずいてしょうがなかったんだから。

このうずきは、新一に解消してもらおうとしよう。

そして、セックスを楽しんだ後は、がんばって新一に『愛してる』
って言わせよう。

今日まだ一度も言ってくれてないし…。

まあ、新一はなかなかそういうことを面と向かって言えるタイプじゃないしなあ…。

そうだ！

お父さんの持つてる本の中に、『口を割らせる百の方法』っていう本があった。その本のコラムには、『戦時中の様々な国における、捕虜に対する尋問の仕方』っていうのが載ってたつけ。

それによれば、あのころの尋問では、『爪はぎ』が最もポピュラーで、効果的なやり方のひとつだって書いてた。

たいていの捕虜は、その激しい痛みと、「ああ、あとこんなに爪が残ってる」っていう恐怖感から、自分からしゃべってしまうんだって。

新一にこの話をちらつかせて、「言わなきゃ同じことするよ。」みたいなことを言って脅せば、きつと愛してる、くらいすぐに言ってくれるよね？

まあ、本当にそんなことをする気はないけど、新一が言わなかったときの保険として一応爪切りは持っていこう。
一応ね？一応。

蘭は、

うふふふ

と笑いながら、また寝室へと歩いていった（途中で爪切りをとり、リビングへ入った）。

対峙する蘭と灰原（前書き）

意味不明な点、矛盾点など見つけたら教えてください。

対峙する蘭と灰原

私は締まらない顔のまま、寝室に入る。

新一は相変わらず穏やかな顔で眠っていた。

やっぱり疲れてるんだ。まあ、あれだけたくさんすれば疲れるのもムリないか。

でも、まだまだよ新一。

あの喋れなかったひと月ぶんは、きっちり働いてもらっからね。

私は毛布を剥ぎ取る。

新一は、パンツ一枚で大の字になって寝ている。

ああ、何度見てもキレイな身体。

引き締まった肉体をしているにも関わらず、肌がつるつるでまるで女の子みたい。

…まあ、今はたくさん痣や傷が出来てしまっているんだけど。

新一の身体を見ていたら、またうずいてきてしまった。
だめだ、我慢出来ない…。

私は、新一を起こさないようにゆっくりと顔を近づける。

新一の整った顔が間近にある。新一の顔を見ると、無性にキスがしたくなるのは私だけかしら。

「楽しもうね、新一。」

そう言って、私はそっと口付けをしようと――

「――悪趣味ね。寝込みを襲うなんて。」

…。

なんでまだあなたがここにいるのよ…！

「あ、哀ちゃん。どうしたの？忘れ物？」

「あら。この状況でまだしらをきるつもり？」

彼女の提案で、リビングで話すことに。
だけど、お互い座らずに立ったまま向き合っている。

哀ちゃんは私の眼を真っ直ぐに捕らえ、少しも逸らそうとしない。
まったく、度胸がある女の子ですこと。

「私が新一を捕まえてるって解ってたの？」

「ええ。あの部屋を覗いた時に、手錠がちらっと見えたし、それに
――」

「あなた、笑顔が偽物になってたしね。」

…へえ。

気付かなかったわ。

やっぱりこの子、ただ者じゃないみたいね。
新一が勘違いして惚れてしまうのも解るわ。

でもまあ、そんなことどうでもいいや。

嬉しい事に、彼女は一人で来てる。

こんなチャンスはない。

見てなさい。

その生意気な顔、涙と血でぐちゃぐちゃにしてやるわ。

つと、その前に、聞きたい事があった。

「…解っていたなら、どうしてさっき言わなかったの？」

「…あの子たちを失望させたくなかったから。」

なるほどね。友達のためってわけ。

「ふーん。まあ、私は失望されようとされまいと、どうでもいいんだけどね。私には、新一さえいれば生きていけるから。」

「彼が望んでいなくても？」

「いずれアイツから望むようになるわ。絶対に。」

哀ちゃんは、深いため息をついてから、私を見た。
とびつきり、哀れむような眼で。

「…何よ、その眼は。何か言いたそうじゃない。」

「…あなた、本当に変わったわね。」

変わった？

「昔はもつとキレイな眼をしてた。強さと美しさ、そして優しさがこもったキレイな眼だったわ。まるであなたの内面を映す鏡のようだった。それが今じゃ、どろどろに煮詰まったマグマのような、濁った色になってしまってるもの。」

何言ってるのよ。

意味が解らないわ。

「何があなたをココまで変えてしまったかは解らないけど…。この際、それはもうどうでもいいわ。ただ言えるのは、こんなやり方や決して幸せになんかなれないってことね。…あなたも本当は解っているんでしょ？」

は？

誰が幸せになれないですって？

誰のせいでこんなことになってると思ってるのよ。

「…よく言っわよ。幸せを奪った張本人が。」

しかも童貞まで奪って。私がもらっ予定だったのに！

「いいえ。彼との関係が壊れた原因は、間違いなくあなたよ。元はといえば、あなたが彼を裏切ったんじゃない。あなたが新出先生に『鞍替え』しなければ、彼だってあんなに苦しまなくてすんだわ。」
哀ちゃんは今から次へと言葉を紡ぎだしていく。

なんだか、私が負けているような気がして気にいらなかった。

「く、鞍替えて……！そ、それに、それは新一が——」

「彼が、何？『いつまでも私を待たせるから！』とでも言いたいのかしら？……彼の気持ちも考えずに、よくもまあそんなことが言えたものね。いい？彼は、あなたを危険から守るために——」

「何も知らないくせに偉そうに言わないで！」

「知ってるわよ。彼がどれほど苦しんだか。あなたより、よっぽど知ってる。」

何よ。

何よ、何よ、何よ……！

「結局あなたは自分が一番かわいいのよ。だから、ちょっと待つのに疲れれば他の人へ移って、かと思えば彼を忘れられずにまた戻ろうとする。まったく、自分勝手もいいところだわ。」

うるさい。

「しかも、自分の好きな人に、監禁、暴力、強姦……。まだ彼を傷つけるつもりなの？」

うるさい。

「いい？工藤君はもう次に進んでいつているの。それなのに、あなたに縛り付けられていたら先へ行けないわ。あなたも、新出先生と仲良く——」

「うるさああああああい……！！！」

気づけば私は彼女の上にのしかかり、首を思い切り絞めてしまっていた。

彼女は苦しそうに必死にもがいている。

だが、手をはなすつもりは毛頭なかった。

「私には、新一が必要なの！アイツが死ぬほど大好きなのよ！もう、待つのはたくさんなの！寂しい日々はもう嫌なのよ！」

「…っ。よ、よく言うわよ。か、彼を、き、傷つけるやり方しか、出来ないくせにっ…。」

「仕方ないじゃない！私だって、もう訳わかんないよ！何でこうなったのか、どこでこうなっちゃったのか！訳わかんない！…ああもう！全部、あんたのせいよ！」

そうよ。

あんたのせいだわ。あんたのせいで、私と新一は…！

殺す。

殺してやる！

「殺してやるうううう！」

私は力を振り絞った。

もう、何がなんだか、わからなかった…。

「はあ、はあ。」

私は乱れている呼吸を必死に整える。

正直、死ぬかと思った。

予備の時計型麻醉銃をもっていなければ、どうなっていたか解らない。

それにしても…。

「やっぱり、少しおかしいわね。」

彼女の精神状態は、明らかに常軌を逸していた。

まるで、何かにとり憑かれているかのように、目は血走り、息荒くしていた。

恐らく精神病であろうが、一体何が原因で…。

私と工藤君だけが原因とは思えない。

何か、何かある…。

と、考える前に、君を救出しないといけなかったわね。

彼女の服をまさぐると、手錠の鍵はすぐに見つかった。

私はその鍵を持って階段を上がる途中、蘭さんに向けて独り言のようにつぶやいた。

「…私があなたを麻醉銃で撃つの、これで二回目ね。ご愁傷様。」

『お願い…。一人にしないで…。』

…。

また、この夢か…。

『待つだけって…。結構辛いんだよ？』

……ごめんな。

『こんなに傍にいるのに、どうして本当のこと言ってくれないの…？』

…ごめん。

俺、オメーのこと、悲しませてばかりだったな…。

『キザでかつこっけで推理オタクで、でもいざって時には頼りになる、私の自慢の幼馴染なんだ。』

『行ってきなさいよ。私は誰かさんと違って、逃げも隠れもしない』

からさ。』

『言い訳なんて…。聞きたくないよ…。』

『私だって、新一に聞きたいこと、いっぱいあるんだから!』

『あーあ、絶対放さないって、決めてたのになあ…。』

『声ぐらい聞かせなさいよ、新一…。』

『ずっと待ってるからね。新一。』

蘭…。

『私、新一のこと、だーい好き!』

「…つと。…よつと！ちょっと！工藤君、起きて。」

目を覚ますと、そこには蘭の姿はなく、代わりに灰原が心配そうにコナンを覗き込んでいた。

コナンの手錠ははずされて、手首には痛々しい痕がくつきりと残っていた。

「工藤君…！良かった、気がついたのね。」

「は、灰原…！き、気づいてくれたのか。」

「ええ。それよりあなた、体のほうは大丈夫なの？」

珍しく必死な灰原に少々驚きながらも、コナンは笑顔で返した。

「ああ。骨に異常はないと思うぜ。」

そんなコナンに、灰原は思い切り抱きついた。

「もう…。心配かけないでよ…。」

「お、おう。わりー。」

灰原がらしからぬ行為に、顔が真っ赤になってしまふコナンだった。

気を取り直し、コナンは灰原に問う。

「その、ところで…。蘭は？」

不安げな目を灰原に向ける。

灰原はふう、と息をついてから、

「…彼女なら、麻酔針を撃たれて眠ってるわ。多分、起きたらまた暴走するでしょうね。」

とごく淡々と言った。

それに対し、コナンは安心しきった顔で一言「良かった」、とつぶ

やいた。

「じゃあ、ひとまず今は安全なわけだ。」

「彼女のこと、どうするつもり？警察に行くの？」

「いや、その前に…。少し調べたいことがあるんだ。灰原も手伝ってくれねえか。」

灰原は不思議そうな顔でうなずいた。

今この状況で、何を調べるといふのか。

「それは良いけど…。一体、何を調べるっていうのよ？」

「まずは蘭のところへ行ってからだ。そこで説明すつから。」

「ええ、わかったわ。…ところで、工藤君。」

「ん？」

「あなた…。さっき、涙が流れてたけど…。」

「…そっか。」

二人は蘭のところへと向かう。

そこで判明した事実は、コナンと灰原に大きな衝撃を与えることになる。

決戦　く新出智明く（前書き）

更新遅れてすいません（泣

最終章スタートです。

決戦　く新出智明く

「すいません新出先生。こんな遅くにお邪魔してしまって。」

「いやいや。コナン君ならいつでも大歓迎だよ。それで、今日はどうしたんだい？」

「実は、ちょっと先生に聞きたいことがあって。」

「聞きたいこと？」

「蘭ねえちゃんのことです。」

「…？」

「話の前に。先生は、『ヘザー』っていう薬ご存知ですか。」

「…。うーん、聞いたことないなあ。」

「『ヘザー』は最近日本でも回り始めた薬物で、まあ言ってみれば覚せい剤みたいなものです。」

「ふんふん。」

「これを打たれると、一時期は気分の高揚、集中力の増加、そして疲労の解消などのプラスの効果が現れます。しかし、しばらくの後、精神の状態がかなり不安定になっていきます。最初の症状は軽めですが、薬を続ければ続けるほど症状はどんどん酷くなります。情緒不安定から始まり、思考・判断能力の欠如、幻覚・幻聴・幻想、さらには多重人格の発生など、多様な症状が見られます。人によって違いはあるようですが。」

「…ヘー。」

「しかしこの薬の恐ろしいところは他にある。」

「…。」

「この薬を摂取した人間は、摂取した前後の記憶が無くなってしま

うんです。つまり、薬を受けた人は、自分が薬に侵されているという事実を知ることができない。」

「…。」

「この薬の被害者のほとんどは、第三者からの摂取によるものだからです。」

「…君は何が言いたいんだい？」

「もう解ってるんじゃないですか？」

「…どういうことかな。」

「蘭姉ちゃん、ここ最近見るからに様子がおかしかったってことは、もちろん知ってますよね？」

「…そうかい？家では全然…。」

「今日は僕に手錠をはめて、暴力をふるいました。今朝からついさっきまで、ずっと。」

「…！」

「蘭姉ちゃんがそんなことをするはずがない。そうですね？」

「…もちろん。君は作り話がうまいな。さ、そんな話なら今日はもう――」

「蘭姉ちゃんの腕に、注射痕がありました。」

「…っ！」

「…疑うには十分でした。」

「…彼女がその薬の常用者だと言うのかい？たったそれだけの理由で…？」

「いえ、僕が言いたいことはそういうことじゃない。」

「……？」

「……ひかるさんに、電話して聞いてみました。蘭姉ちゃんが自分で『注射』しているところを見たことがあるかどうか。」

「……。」

「その質問に対して、ひかるさんはこう答えました。『彼女が自分で打っているところは見たことが無い』が、『新出先生が打ってあげているところは何度か見かけたことがある』、とね。」

「……。」

「どういうことです、先生。」

「……ああ。そういえば彼女にビタミン剤を——」

「とぼけんなよ。」

「……。」

「……あんたがやったのか？」

「……。」

「………答えろっ！」

コナンの怒号を受けても、新出智明は一切表情を変えない。それどころか、□元にはうつすらと笑みが浮かんでいるように見える。

新出はやれやれ、とため息をついた。

「…ふう。なんでそれだけで僕が彼女に薬を打っていることになるのかな。」

「俺の知り合いに蘭の血液を調べてもらったら簡単に解ったよ。蘭が薬の使用者だってことがな。」

「だから、それで何で僕が蘭に注射したことになるのかって聞いているんだよ。ひかる君の見ていないところで、蘭自身が打ったのかもしれないし、誰か違う人に打たれたかもしれない。僕が打ったという、証拠が無いだろ？」

ふん、と新出は勝ち誇ったように鼻で笑う。それは、コナンの見慣れていた人の良さそうな笑顔ではなく、悪魔じみた嘲笑の笑みであった。

一方コナンは、何も言わず鋭い眼光で新出をにらみつけている。その顔には明らかな憎しみが含まれていた。

「『ヘザー』は今一番流行している薬だからな。警察の捜査も拡大してる。あんたに薬を売りつけたバイヤーも、近いうちに捕まっちゃうだろう。そうなればあんたも言い逃れできないぜ。」

「大丈夫さ。誰も僕を疑いはしないよ。君も僕の人望の厚さは知ってるだろう？」

「そんなもん関係ねえよ。」

コナンが少しも臆さずに言った。

相変わらず、その瞳には強い意志がこもっている。

「ま、もしバイヤーが捕まったとしても、僕のところ警察がたど

り着く頃には、僕は証拠を消してしまっているだろうね。」

ふふふ、とおかしそうに笑う。

「…何がおかしい。」

「いや、気にしないでくれ。それで？君はこれからどうしたいんだい？家に帰る？」

新出は腰に手を当てて、小さな子供をあやすような口調で言った。そのまったく気後れしない態度に、コナンの頭に血が上っていく。

つかみかかりそうになった手を無理矢理引っ込める。コナンは怒りを抑え、必死に心を落ち着かせる。

まだまだ、聞きたいことは山ほどあるのだ。ここで感情を爆発させるわけにはいかない。

「…なんで蘭にヘザーを？」

「……子供の君にはわからないだろうね。大人になってからでないと。」

新出はコナンの質問を聞くと、さっきまでの表情とは打って変わった寂しげな笑みを浮かべた。

「どういうことだよ。」

「……いいかい、コナン君。人間にとって、一番不幸なこと。それは、頼られなくなることだ。」

「…？」

急に話を変えた新出を不審に思いながらも、コナンは黙って耳を傾ける。

「頼られなくなるってことは、つまり…。なんていうのかな、必要とされてないってことなんだ。良好な人間関係って言うのは、頼り頼られ、相互に支え合う関係のこだ。そうは思わないかい？」

「…あんだこそ、何が言いたいんだよ。」

厳しい口調のコナンに対し、新出はおいおい、と慌てたように返す。「そう、邪険にしないでくれ。…で、どこまで話したっけ？…ああ、

そうそう。良好な人間関係ね。」

新出は一度咳払いをして、続けた。

「まあ、結果から言うところ…。僕と蘭には、その良好な関係ってやつが築けなかったってことさ。僕は彼女を本気で愛していたけど、彼女は違った。…僕のことは、うーん、なんて言うか、頼れる親戚のお兄さん、て風にしか思ってたんだ、きっと。」

新出は寂しそうに話す。それはコナンへというより、自分に向けて話しているようであった。

「彼女の心にはずっと、新一君が居座っていたよ。僕が入り込む余地なんて全然なかった。」

苦しそうに話す新出を見て、コナンの表情にも影が落ちる。

ずっとにらみつけていた目をつい逸らしてしまい、新出を直視することが出来なくなってしまった。

「……蘭は、月日が経つにつれて、新一君をどんどん想うようになってね。夜になると、悲しそうに携帯を見つめて…。きっと、新一君の着信を待っていたんだろう。…そんな状態でも、僕には相談してくれなかった。頼ってくれなかった。」

コナンは握り締めていた手を、さらに強く握った。

今すぐにでも、蘭の元へ駆け出し、心の底から謝りたい気分になる。コナンは自分のふがいなさに、新出に対するものとは違う怒りがこみ上げてきていた。

「それが寂しくてね…。せめて、辛いときくらいは頼って欲しかったんだ。力になりたかった。ほんの少しでいい。僕のことを愛していなくてもいい。ただ、彼女の力になりたかったんだ。…けれど、そんな僕の想いもむなしく、今年の四月のはじめに、ついに離婚届けを渡されたよ。」

「え？」

コナンが驚きの声を上げる。

「僕は必死になって止めたよ。そして、僕のこの気持ちも嘘偽りなく伝えた。もっと頼って欲しい、一人で抱え込まないで欲しい。力になりたい。…けど、彼女の意味は固かった。離婚するってきかなかった。もう自分に嘘はつけない、なんて言っただけ。」

新出の言葉の語尾が震える。ふとコナンが見やると、彼は唇をかみ締め、血がにじんでいた。

うつむきがちに話しているため、どんな表情かは読み取れない。

新出は一度口をぬぐうと、静かにまた語りはじめた。

「ほら、彼女、頑固なところがあるだろ？こうなるともう、どうしようもない。…でも僕は、どうしても諦め切れなかった。彼女のように、外側も内側も美しい女性なんて、この世界に何人いるか。僕はもう、完全に彼女の虜だったのさ。ふふふ。」

新出は体を逸らし、手で顔をおさえ、自虐的に笑った。その口元は、蘭がコナンに暴力を振るうときのように、不気味に歪んでいた。

「その時さ。その時ふいに思い出したんだ。僕のところには診察を受けに来た患者の中で、薬漬けの人がいたこと、その患者が隠し持っていた、『ヘザー』という神秘的な薬のこと、そしてその薬を『没収』したまま、警察に届けるのを忘れてまだ家に保管していたことをね。…これなら利用できると思った。我ながら、よく思い出したよ。はははハハ。」

新出が笑いながら、自身の顔を覆っていた手をゆっくりと離れた。

その顔を見た瞬間、コナンの背中に、何か冷たいものが走った。

彼の眼は血走り、焦点がまるで合っていない。ぎよろぎよろと絶え

間なく動き回り、眼だけが別の生き物のようであった。まぶたはひくひくと痙攣しており、口元には相変わらず不気味な笑みがへばりついている。

コナンはこの異様な事態に、無意識に後ずさりしていた。

「なっ……。ど、どうした？」

「どうした？それはこっちの台詞さ。そんなに青ざめてどうしたんだい？」

新出はにたにたと笑う。

「まあいいや。それでね、僕は睡眠薬入りの飲み物で彼女を眠らせたあと、『ヘザー』を打ったんだ。彼女が眠りから覚めたときには離婚届けのことなんてすっかり忘れていたよ。いやーまったく、便利な世の中になったもんだね、コナン君。あははハ。ふ、ふふフフ。」

今度は、齒をむき出しにして獣のように笑った。

なんだ、これは。何が起きている。

コナンは新出の左腕を見る。

そこには、太い針を刺したのだろうか、くつきりと注射痕が残っていた。

「しかも！しかもだ。それから彼女は元気を取り戻して、僕に離婚話を切り出さなくなったんだ。いやー、ホントに嬉しかったよ。……へへ、でも、後遺症ってのは遅れてやってくる。蘭にもそれは例外なく訪れたよ。……まあ、この後遺症のおかげで、僕は幸せを取り戻せたんだけどね。」

「……何？」

新出はつんざく様な大声で笑った。

「あはははははははははは！！精神崩壊に陥った彼女を救えるのは、僕だけだった！毎夜毎夜、彼女はうなされるたびに、僕に救いを求めてきたよ。僕を『頼って』きたんだ！今までほとんど頼ってこなかった、この僕に！それも、捨てられ、虐待され続けてきた哀れな子猫のような、庇護欲をそそる眼でね。……ああ、あの時は本当に幸せだった。でもまさか、ひかる君に見られていたとはね。誤算だったよ。」

新出は演説家のように、大げさな身振り手振りを使い表現する。だがその動きは、心をもたない機械のように人形じみていた。

コナンは新出の言葉を聴きながら、震える指でキック力増強シューズのパワーメモリを回す。電磁波を帯びたコナンの足が、金色に光り輝いた。

「僕は治療と称してまたヘザーを打つ。精神は一時的に安定する。時間とともにまた不安定になる。僕を頼る。そしてまた治療。こんな感じで、僕らは頼り頼られる、幸せな関係になれたというわけさ。くくく。」

「…あんたも薬を打ったな？」

コナンの質問に、新出はぽかんと口を開ける。

「…何言っているんだい、きき君は。僕がそそんなことするはずないらる？馬鹿なことをい言わないでくくれよ。」

新出はへらへらと、ろれつのまわっていない妙な口調で話す。

一方、そんな新出を見て、コナンにはまた怒りがこみ上げてきていた。先ほどの恐れは、もうすでに消えていた。
こんな奴に蘭は。

「テメーの自己満足でばろぼろにされちまった蘭にとっちゃ、いい迷惑だぜ。」

「……だから言つたろう？君のような子供にはわからない話だったんだ。さ、もう帰ってくれ。蘭はどこにいるんだい？連れてこないと――」

「ふざけんな。」

新出の言葉を遮って、コナンの声が響いた。それほど大きくなかったにも関わらず、その声は不思議と部屋中に響き渡った。

コナンはベルトのスイッチを押す。すると、ベルトの小さな穴から白い何かが膨れ上がり、みるみる大きくなっていく。

「なんだって？」

「ふざけんなって言うてんだよ。テメーは自分のことばかりで、蘭のことは全然考えちゃいない！惚れた相手のことを想いやれないあんたが、幸せになれるわけねえだろうが。」

コナンは目を逸らさずに言う。臆さず一歩も退かない、強い意志のこもった言葉だった。

コナンの言葉を聴いて、新出はわなわなと体を震わせた。

「僕が、幸せになれないだって……？」

「ああ、そつだよ。あんたは心が弱いんだ。だから、薬に頼ろうなんて考えが真つ先に浮かぶ。……でも蘭はあんたとは違う。あいつは、他人のことを考えられる、強い人間だ。自分の幸せより、他人の幸せを願える、優しい人間だ！テメーのエゴに、蘭を巻き込むんじゃないねえ……！」

コナンが言い終わると同時に、ベルトからサッカーボール大の球体が噴出した。

「……。お、お前に、お前に何がわかる！」

新出は大声とともに駆け出した。両手はコナンにつかみかかろうと、

ゾンビのように伸びている。

コナンは冷静に狙いを定めると、サッカーボールを蹴りぬいた。キック力増強シューズで威力の増したボールは、吸い込まれるように新出の顔にぶち当たった。

「うぐうっ」

新出は一度うめくと、そのまま床に倒れ臥した。少しの間立ち上がるうと必死にもがいていたが、脳震盪でも起こしていたのだろうか、やがて動かなくなった。

コナンはふうつとため息をついた。そして一言、嘆くように言った。

「俺は、あんただから蘭を預けていいと思ったんだ。何があんたをこんな風に変えちまったんだよ、新出先生……。」

その言葉のあとには、時計の針の動く音だけが、静かに響いていた。

間章

遅い。

彼が出て行ってから、もうずいぶん時間が経った。深夜零時を過ぎた今も、いつこうに帰って来る気配はない。

携帯にも連絡してこないし…。

やっぱり、彼の身に何かあったんじゃないだろうか。さつきから、同じ考えが頭の中をぐるぐると回っている。

もし工藤君の推理が当たっていたとしたら、彼はそんな危険人物の家にのこのこと足を踏み入れていることになる。何かあってもおかしくはない。

いくら彼の経験値が高いと言ったって、相手はあの新出先生だ。あの、万人向けのさわやかな笑顔に油断してやられてしまうことも十分に考えられる。

……いやいや、彼がそんなどじを踏むわけがない。人間は、何かのきっかけさえあれば、天使にも悪魔にもなることを彼は知っている。人柄で判断するほど彼はバカじゃない。

……。

でも、少しお人好し過ぎるところも……。

それに、少し張り切りすぎるところもある。

どんどん深追いして行くのは、彼の悪い癖だ。

深追いして、あと一歩で取り逃がして、逆に自分を危険にさらして

しまう。昔はよくあった。

今回もそのパターンなんじゃないだろうか。

もしくは蘭さんのケースのように、監禁されているかもしれない。なんたつて蘭さんと新出先生は夫婦なのだから考えられなくはないわよね。

…やっぱり、様子を見に行つた方がいいのだろうか。いやでも、彼の足手まといになるのはごめんだし…。でも、もし彼が私の助けを待っているとしたら…？

あーもう。

うだうだ考えるのはやめだ。

考えたつて仕方がない。解らないときには何か行動しないと。

…どうやら工藤君の性格が私にも移っちゃったみたいね。

苦笑いしながら、私は玄関に向かう。

だが、玄関の扉に手をかけた時、力を込めていないのにもかかわらず、扉は勝手に開け放たれた。

「え？」

「ん？おう、灰原。まだ起きてたのかよ。」

そこには、あっけらかんとした顔の工藤君が立っていた。

「まったく…。あなたって男は、電話のひとつもかけられないのね。」

「っせなー、悪かったって。こっちも、いろいろ大変だったんだよ。」

工藤君は疲れた顔で、私の嫌味を面倒くさそうに流した。
まったく、私がどんな思いで待ってたかも知らないで…。のんきなものだ。

「……心配させないで。あなたに何かあったんじゃないかってひやひやしてたんだから。あなたはいつも無茶ばかりするから、待ってるこっちはたまったもんじゃないんだから。」

「…あ、ああ。」

私の言葉を聞いた工藤君は、意外そうな表情を浮かべた。

「…何よ、その顔は。」

「い、いや。なんでもねえよ。ただ…。」

工藤君が言葉を濁す。

何よ、じれったいわね。

言いたいことがあるならはっきり言いなさいよ。

私は工藤君に逃げ場を与えないよう、追い詰めるように問いただした。

「ただ何？」

「い、いや、お前がそんなに素直に言うとは思ってなくてよ。つい驚いちまって…。ハハ。」

工藤君はそう言つと、困ったように笑った。

工藤君の言葉を聞いて、私も驚いて固まってしまった。

確かにそうだ。さつきはさりげなく言ってしまったが、以前の私からは考えられないことだ。
一気に顔の温度が上昇する。

私は照れ隠しに話を逸らし、本題に入った。

「で？どうだったの？」

「ああ…。やっぱり、予想通りだったよ。」

工藤君は悲しそうな顔で先の出来事を語り始めた。

「そう…。そんなことが…。」

工藤君は一気にしゃべりつくしたようで、話し終わるとソファーに深く腰掛けた。

話は終始重い口調だった。

「それで？新出先生は？」

「ああ。おっちゃんに連絡したらすつ飛んできたよ。おっちゃんには全部話したから、後は全部やってくれるさ。」

「よくあの人が信じたわね。そんな話を。」

あの石頭がそう簡単に信じるだろうか？

「ああ。こいつを聞かせたんだ。」

そう言って、工藤君はなにやら大きいボールペンのようなものを取

り出した。

ボールペンにしては大きすぎるような…。

「それは？」

「ボイスレコーダーさ。博士が開発したんだ。録音も出来るし、声質も変えられる。十年前に作られたやつだよ。」

「へー…。」

なんだかんだ言っで、博士はすごい。正直言っで、あれほどの人材が世にあまり知られていないのはおかしいと思う。

「で？上で寝ている彼女はどうするのかしら？」

「ああ。おっちゃんかひと段落したら迎えに来てくれるってよ。だから、もう少し俺は起きてねえと。」

「そう。」

「…。」

工藤君はレコーダーをテーブルの上に置くと、黙り込んでしまった。

「…どうしたの？」

「…ヘザーの治療には時間がかかる。治療中の精神的苦痛も相当なものらしいしな。」

工藤君は重い口を開いた。

「…みたいね。」

「…なあ、灰原。俺、どうすりゃいいのかな。何が出来るんだろうな。」

「…。」

辛そうに話す工藤君に、私は何も言っでやれなかった。言葉が見つからなかった。

確かに、今工藤君が彼女にしてやれることは、ほとんどないと言える。

彼がああ精神状態の彼女に会っても、火に油を注ぐだけ…。症状は悪化するだろう。何せ、全てではないにしろ、彼女がああなった原因は工藤君にあるのだから。

それに、工藤君も罪悪感で辛い思いをするだけだ――。

そこまで考えた私に、さらに最悪な考えが浮かぶ。

もしかしたら、工藤君は今回の件で、私を捨ててしまつのではないだろうか。

優しい彼のことだ。蘭さんのことは全て自分のせいだと思っているに違いない。

罪滅ぼしという形で、蘭さんのもとへ行ってしまうのでは…？

それに、あの二人はあのすれ違いがあるまでは、あんなにまで想い合っていた仲だ。それこそ、私の入り込む隙間などないほどに…。

お似合いだった。私みたいな暗くて嫌味なオンナよりも、彼女はずっと工藤君にふさわしかった。

明るくて、強くて、優しく、時には弱くて…。完璧だった。太陽みたいだった。

もし工藤君が、彼女の元へ行きたいと言うのなら、私は――

「くだらねえこと考えてんじゃねえぞ。」

「え？」

急に聞こえてきた工藤君の声で、私の思考は中断された。

工藤君は立ち上がると、力強く私を抱きしめた。

「きゃっ」

つい声が…。

工藤君はかまわず、そのままソファに腰を下ろした。

私は工藤君の膝の上で、向き合うように座っている。

また顔が赤くなっていくのがわかる。

「ちよつ。何するのよ。恥ずかしいから離して――」

「オメーの考えてることくらいわかんだよ。」

「え？」

工藤君は腰に回していた手を離すと、私の肩をつかみ、私と向き合った。

工藤君の顔がゼロ距離にある。

鼓動がどんどん加速していく。

「言つたろ。俺はお前を一生守る。灰原が好きだ。蘭のことは俺が必ずどうにかする。けど、俺が蘭をまた好きになることはねえよ。俺には、もうオメーしか考えられねえから。」

そう言つて、工藤君は私に優しくキスをした。

「……ホント、『工藤君』、て感じの台詞ね。言つてて恥ずかしくないの？」

破裂するのではないか、というくらいの心臓の音を必死に隠すように、工藤君の膝から降りて、彼に嫌味を飛ばす。

でも工藤君は、嬉しそうに

「まあな。これが俺のやり方だから。」

と笑った。

私もつられて笑顔になる。

私は本当に、いい男に恵まれた。

深夜ということも忘れて、しばらく話し込んでいた時、不意にチャームが鳴った。

「おっちゃんかな。」

「早すぎるわよ。きつと博士だわ。そういえば私、博士に何も言っ
てなかったから。ちょっと出てくるわね。」

私は玄関に向かった。

私は完全に油断していた。

ドアを開けてまず見たのは、視界を覆いつくす『黒』。

全てを塗りつぶす漆黒。

邪悪な暗黒。

長身のその男は、悪魔を思わせる残酷な笑みを浮かべた。

その顔は――

「ジ――」

声は出なかった。

私の口に押し当てた黒いハンカチは、私の意識を奪っていく。
薄れゆく意識の中、頭に工藤君の笑顔が浮かんだ。

私は組織の手に落ちた。

組織との最後の戦いが、始まろうとしていた。

番外編 コナンと灰原と平次と和葉（前書き）

番外編です。

本編に平次と和葉の出番がないので、無理矢理作りました。
そして、いつも以上にやつつけない文章です笑。ごめんなさい。

↑

番外編 コナンと灰原と平次と和葉

いきなりそれを言い出したのは和葉だった。

「ねえねえ、工藤君と哀ちゃん、もうエッチはした？」

和葉の質問に、コナンは飲みかけていたコーヒーを盛大に吹き出した。

「うわっ汚な！」

「わ、わりい服部。いや、和葉ちゃんがとんでもねえこと言い出すから。」

コナンは顔を真っ赤に染め、テーブルを濡らしたコーヒーを拭き始める。

「ねえ、どうなん？したの？」

和葉が待ちきれないといった様子でコナンに催促する。

「いや、そんなこと言えるわけ——」

「したわよ。」

はぐらかそうとしたコナンを遮るように灰原が答えた。

「お、おい灰原！」

「何よ。恋人同士なんだから、別に恥ずかしいことじゃないじゃない。何をそんなおどおどしてるのよ。」

焦るコナンとは対照的に、灰原は臆すことなく言っただけだ。

「へえ、なんや工藤。このスケベ。」

平次はにやにやと笑いながら、からかうように言った。

「っせーな。オメーは黙ってるよ。」

コナンはいったん気持ちを落ち着かせようと、またコーヒーを飲み始める。

「で？工藤君どんな感じ？」

「そうね…。強いて言うなら、彼は『胸好き』ね。」

コナンはまたコーヒーを吹き出した。

「ええ！？そうなん！？」

「ええ。初めてのときなんかもう胸ばかり。まるで必死におっぱいにしゃぶりつく赤ん坊のような——」

「は、灰原！てめえ！！」

コナンは慌てて灰原の口をふさぐ。

しかし、コナンの努力もむなしく、平次と和葉はすでに盛大に笑っていた。

「あはははは！ま、工藤。恥ずかしがることないで。男はみんなおっぱい星人やから。」

笑い涙をぬぐい、平次があやす様に言った。

「ち、ちがつ！こ、これは！」

両手を大げさに振り、しどろもどろになっているコナンを見て、灰原もくすりと笑った。

「いやー、それにしても、あのクールな工藤君がまさかおっぱい好きやったなんて。やっぱり、男ってみんなそうなんかなー。」
にこにこと笑いながら和葉が言う。

コナンはもうどこかに逃げ出したい気分だった。

「そっちはどうなの？」

灰原がいじけたコナンの頭を撫でながら聞いた。

「あ、それは——」

「それがな。」

慌てて何か言おうとする和葉にかぶせるように平次が言う。

「ちよ、平——」

「こいつ、びつくりするほどキス魔でなあ。」

「キス魔？」

灰原がおかしそうに聞き返す。

その顔を見て、まるでガキ大将みたいな顔だな、とコナンは思った。

「そう。こいつは——」

「平次！やめて！」

暴れる和葉を押さえつけ、平次が続ける。

「こいつ、エツチのときはチューしながらでないとだめみたいでな。ちよつとでも口が離れると『いやあ、平次い、ちゅうしてえ』ってエロい声で鳴きよるねん。なあ和葉？」

和葉は顔を真っ赤にして、目に涙を溜め、今にも泣き出しそうになっていた。

「ひどいで平次……」

「おお、悪かった悪かった。泣くな、な？」

平次はまったく悪びれる様子もなく、ニコニコ笑いながら和葉の頭を乱暴に撫で回した。

「こついうとこ、かわいいやろ？」

平次は同意を求めるようにコナンを見る。

だがコナンは「へっ」と吐き捨て、つれない様子だった。

「なんや、まださっきのこと気にしてるんか？」

「別に。」

コナンはつまらなそうに平次から目を逸らした。

「気にすることないわよ。あの時の工藤君、とてもかわいかったから。」

「オメーな……」

コナンは「はあ」とため息をつく。

だがすぐに、コナンは何かを思い出したように明るい表情になると、

勝ち誇ったような顔で灰原を見た。

「な、何よその顔。」

コナンは灰原の問いには答えず、平次の方へ視線を移す。

「おい、服部。和葉ちゃんのかわいいトコ見せてくれたお礼に、俺も灰原のかわいいトコ教えてやるよ。」

灰原はこの顔の意味するところを知っている。この顔は、事件の犯人を追い詰めるための奇抜なアイデアを思いついた時の表情である。

まずい。

灰原はそう思った。

「工藤君？変なこと言ったら——」

「聞きたい！」

いつの間にか元気を取り戻した和葉が、身を乗り出して言った。

「な、何言ってるのよ！だめよ、工藤君。」

焦りを見せはじめた灰原を見て、コナンはにやにやと笑う。

「でも、和葉ちゃん聞きたがってるし。オメーも俺の恥ずかしいところ言っただから、おあいこってことでいいだろ？」

「工藤君。や・め・て！」

普段ならばここで恐れをなして断念するコナンだが、今回は復讐で頭がいっぱいで、後のことにまで頭が回らなかった。

「えいつ！」

「んん！？」

和葉が灰原の背後に回り、灰原の口を押さえる。

「さ、工藤君今や！」

和葉がさも楽しそうに言った。

「ノリノリやな、和葉。」

平次は特に止めようとするわけでもなく、ただ楽しそうに笑っているだけである。

コナンも楽しそうに笑いながら話し始めた。

「こいつ、普段はこんな感じだけどよ。アツチの時には、猫なで声で、『工藤君、好き』とか、『愛してるわ、工藤君』とか、『もう一生離れないから』とか、恋する乙女みたいなこと言い始めるんだぜ？しかも、してる時だけ呼び方がたまに『新一』になるんだ。そういう時のコイツ、すげーかわいいんだよ。」

言い切つて満足げな表情を浮かべるコナン。

平次も、

「所謂『つんでれ』やな。そらかわいいわ。」

と妙に素直に賛同していた。

さらに和葉は

「何それ！？かわいい〜！」

と灰原に抱きつき頬すりまでしていた。

和葉に抱きつかれながら、灰原は「工藤君……。覚えてなさい……。」「と鬼のような顔でつぶやいていたのだが、気づいた者はいなかったようだった。

「そんなら俺ももうひとつ和葉のかわいいトコを——」

「も、もうやめてやあ！」

自然と始まっていた暴露大会は、まだまだ終わりそうになかった。

「まったく…」

夜。

平次と和葉は阿笠邸に泊まる事になったため、コナンも便乗し泊まる事になった（二人は現在入浴中である。）

灰原の不服そうな声を聞き、コナンは見ていたテレビから視線をずらし、隣に座っている灰原を見る。

「なんだよ。まだ怒ってんのか？」

「ふん。デリカシーのないあなたに、私の気持ちなんてわからないわ。工藤君は男だからまだ大丈夫でしょうけど、私は女なんだから繊細なのよ。」

灰原はいじけたように言った。

コナンはくすつと笑うと、灰原の頭を撫でる。

「何よ。子ども扱いしないで。」

「へーへー。でも、あんときのお前、ホントにかわいいんだぜ？」

「何言ったって無駄よ。」

つんと顔を背ける灰原。

コナンはまた微笑すると、灰原の顔を手でそつと自分のほうへ向ける。

灰原も抵抗せずに、素直にコナンと向き合った。

二人は少しの間だけ見つめあったあと、どちらからともなく口付けをする。

唇を離れたあと、コナンは灰原を抱き寄せ、自分の胸に収め、優しく髪を撫でる。

灰原もくすぐったそうに目を細めた。

「まるで子猫だな。」

「うるさいわね。」

「…お前、ホントにかわいいよ。いつつも。」

「……ありがとう。」

そのころ、平次と和葉は。

「平次、ちゅう。」

「…恥ずかしいのとちゃうんかい。」

湯船につかりながら、和葉が子供のように懇願する。

「平次と二人きりやもん。だから恥ずかしくないよ。」

「ほんと好きやな。あきれてものも言えんわ。」

と言いつつ、キスをする自分が平次はなんだかおかしく思えた。

「なあ、平次？」

「ん？なんや？」

「この子のこと、結局話してないやん。」

そう言つて、和葉は腹部をさする。

「あつ。忘れてた。というか、これ言いにコッチ来たんやったな。」

平次も、和葉の小さな命が宿ったそこを撫でてやる。

「なあ平次？」

「ん？」

「あたしら、めっちゃ幸せやな。」

「そつやな。俺もそう思う。」

それぞれの時間は、
ゆっくりと流れていく。

番外編 コナンと灰原と平次と和葉（後書き）

しばらくは更新できないと思います。

読んでくれる方、本当にごめんなさい。
再開できるのは、三月ころかなあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9134/>

蘭とコナンともう一人 回りだした歯車

2010年10月10日03時34分発行